# 看護実践国際研究センター

平成 30 年度　実績報告書

長野県看護大学
Nagano College of Nursing

# 刊行にあたって

長野県看護大学は、平成７年に長野県初の県立大学として開学して以来、国内外の教育研究機関との共同研究や看護実践活動をとおしてグローバルな視野を持った人材を育成し看護学全体の発展に寄与するとともに、県民の疾病予防と健康増進を進め、その成果をもとに人々のＱＯＬ向上や医療の質向上等に貢献することを目指して教育研究と地域貢献を進めて参りました。

「看護実践国際研究センター(International Research Center in Nursing Practice)」は幅広い視野のもと、講座／分野横断的な教育と研究を強化し、看護地域貢献、異文化交流、学外機関との交流推進等社会における看護の教育研究実践活動の拠点として平成14年12月に設置されました。設置当初、「看護地域貢献研究部門」「異文化看護国際研究部門」「看護実践改革・学外機関交流推進研究部門」の３部門でスタートしましたが、その後「認定看護師教育部門」「卒業生・修了生キャリア形成支援部門」が加わり５部門となりました。さらに、創立20周年を期に、部門の名称の見直しと組織の充実を図ることを目的として再編を行い、平成28年より「看護地域貢献活動研究部門」、「国際看護・災害看護活動研究部門」、「学外機関連携部門」、「認定看護師教育部門」、「キャリア形成支援部門」の５部門としました。再編にあたっては、センターの運営が全学的な取り組みとなるよう、部門内のプロジェクトへの参加は自由意思によりますが、全教員がいずれかの部門に所属して活動できるよう編成しました。看護における教育研究実践の統合（Integrated Nursing Practice）の機能をもつ活動の拠点としての使命を果たすことによって、地域社会に貢献するとともに、国内外から人々を引き寄せる個性豊かで魅力あふれる大学づくり(Magnet College)の拠点となることを目指しています。

昨年10月の公益財団法人「大学基準協会」の大学評価(認証評価)においては、当センターを中心に、研究をはじめとする看護専門職のキャリア教育や社会貢献・国際交流などの多岐にわたって教育研究の成果を社会に還元する活動に取り組んでいることに高い評価を頂きました。

このたび、当センターの活動実績を記録するとともに、その活動を内外にご理解いただくために実績報告書を刊行しました。お目を通していただき、忌憚のないご意見をいただければ幸甚に存じます。

平成31年４月

長野県看護大学学長
看護実践国際研究センター長
北　山　秋　雄

# 目　　次


**第１章　看護実践国際研究センターの概要**

第１節　看護実践国際研究センターの趣旨と沿革 …… 2

第２節　組織 …… 4

**第２章　看護地域貢献活動研究部門**

第１節　看護地域貢献活動研究部門の概要 …… 8

第２節　活動実績

1　地域貢献チーム

1　災害看護支援ＰＪ …… 10

2　高齢者水中運動講座ＰＪ …… 12

3　地域医療介護連携ＩＣＴネットワークシステム（サラス）推進ＰＪ …… 15

4　終末期看護研究ＰＪ …… 17

5　在宅療養者と家族のための移行期看護ＰＪ …… 19

6　子どもと家族への支援ＰＪ …… 21

7　女性の健康づくり支援ＰＪ …… 24

2　出前講座チーム …… 27

3　研究審査担当 …… 29

**第３章　国際看護・災害看護活動研究部門（ＩＲＣ）**

第１節　国際看護・災害看護活動研究部門（ＩＲＣ）の概要 …… 32

第２節　活動実績

1　ＵＳＦ／ＳＭＵ学術交流ＰＪ …… 33

2　サモア国立大学学術交流ＰＪ …… 35

3　中国医科大学／揚州大学学術交流ＰＪ …… 37

4　カンボジア等（東南アジア地域）交流ＰＪ …… 38

**第４章　学外機関連携部門**

第１節　学外機関連携部門の概要 …… 40

第２節　活動実績

1　看護ユニフィケーションチーム …… 41

2　産学官連携チーム …… 45

3　自治体連携チーム …… 46

**第５章　認定看護師教育部門**

第１節　認定看護師教育部門の概要 …… 50

第２節　活動実績 …… 51

第３節　受講生の状況 …… 55

**第６章　キャリア形成支援部門**
第１節　キャリア形成支援部門の概要 …… 58
第２節　活動実績 …… 59

**（資料）**
長野県看護大学看護実践国際研究センター規程 …… 64

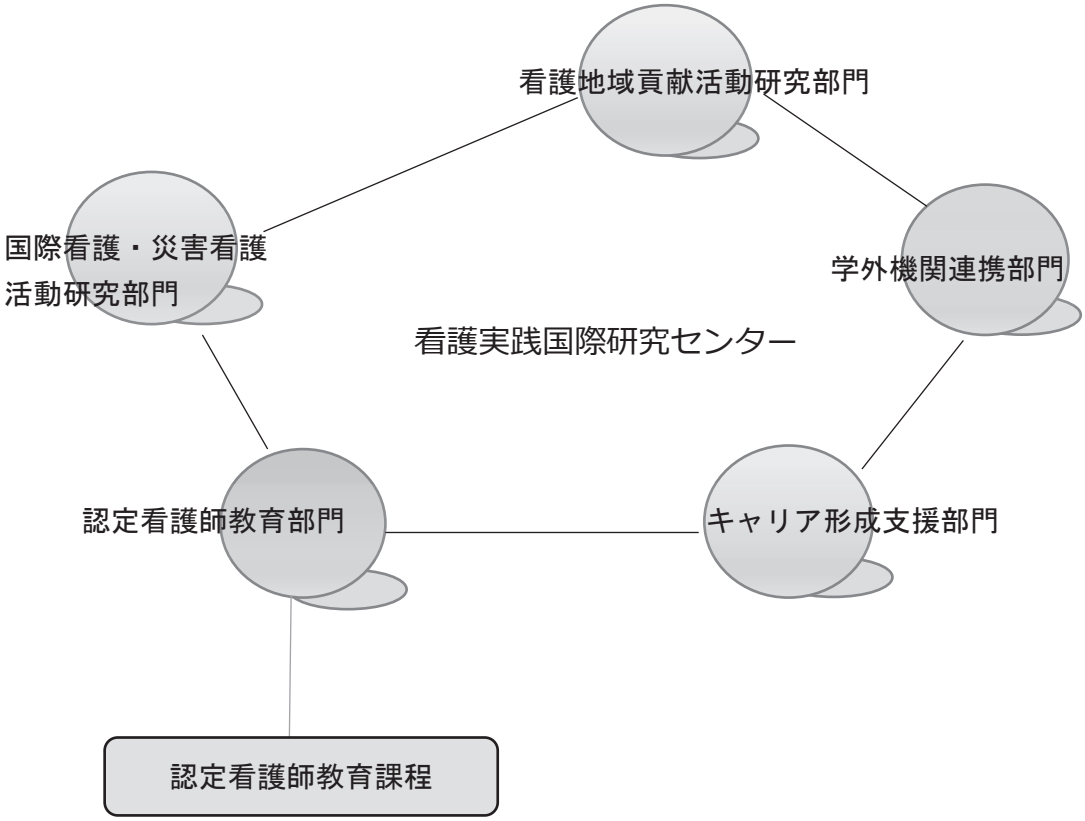
# 第１章　看護実践国際研究センターの概要

## 第１節　看護実践国際研究センターの趣旨と沿革

本学は、平成７年（1995 年）に開学し、地域への貢献を主眼にして、教育、研究を進めてきた。

「看護実践国際研究センター」は、本学における研究の拠点であり、国際的視野の涵養を背景に置き、講座や分野などの専門的な枠を超えた研究実践活動部門として平成 14 年に設置された。

平成 28 年には組織が再編され、「看護地域貢献活動研究部門」、「国際看護・災害看護活動研究部門」、「学外機関連携部門」、「認定看護師教育部門」、「キャリア形成支援部門」、の５部門で活動を行っている。



## 沿　革

○平成 14 年（2002 年）2 月～3 月

・ 看護ヒューマンアプローチセンターを創設し下記 2 部門を配置

　看護カウンセリング部門

　（その後、看護エンパワメント部門に名称変更）

　健康づくり支援部門

・ 異文化看護国際研究センターを創設

○平成 14 年（2002 年）12 月

・ 前記２センターを統合し、「看護実践国際研究センター」を創設、下記３部門を配置

　看護地域貢献研究部門

　異文化看護国際研究部門

　看護実践改革・学外機関交流推進部門

○平成 15 年（2003 年）1 月

・ 学外機関との共同研究の取扱いについて「長野県看護大学共同研究取扱規程」を整備

○平成 17 年（2005 年）3 月

・ 学外機関等からの受託研究の取扱いについて「長野県看護大学受託研究取扱規程」を整備

○平成 20 年（2008 年）7 月

・ 県の組織規則に「看護実践国際研究センター」の機能（設置根拠）を規定

○平成 23 年（2011 年）4 月

・ 認定看護師教育部門を配置（計４部門）

○平成 23 年（2011 年）9 月

・ 講座や分野を超えた学内の共同研究活動により、県及び地域の看護等の発展に寄与するため、「長野県看護大学「教員特別研究」実施要項」を整備

・ 県内の職場等で働く看護職者が、自ら提案する研究テーマについて、本学の教員が共に調査・研究に取り組み、地域の看護等の発展に寄与するため、「長野県看護大学「県内看護職者との共同研究」実施要項」を一部改正

○平成 24 年（2012 年）3 月

・ 卒業生・修了生キャリア形成支援部門を配置（計５部門）

○平成 28 年（2016 年）3 月

・ 部門の名称見直しと内容の充実を目的として「看護地域貢献活動研究部門」、「国際看護・災害看護活動研究部門」、「学外機関連携部門」、「キャリア形成支援部門」、「認定看護師教育部門」の 5 部門に再編

## 第２節　組織

### １　運営体制（平成 30 年度）

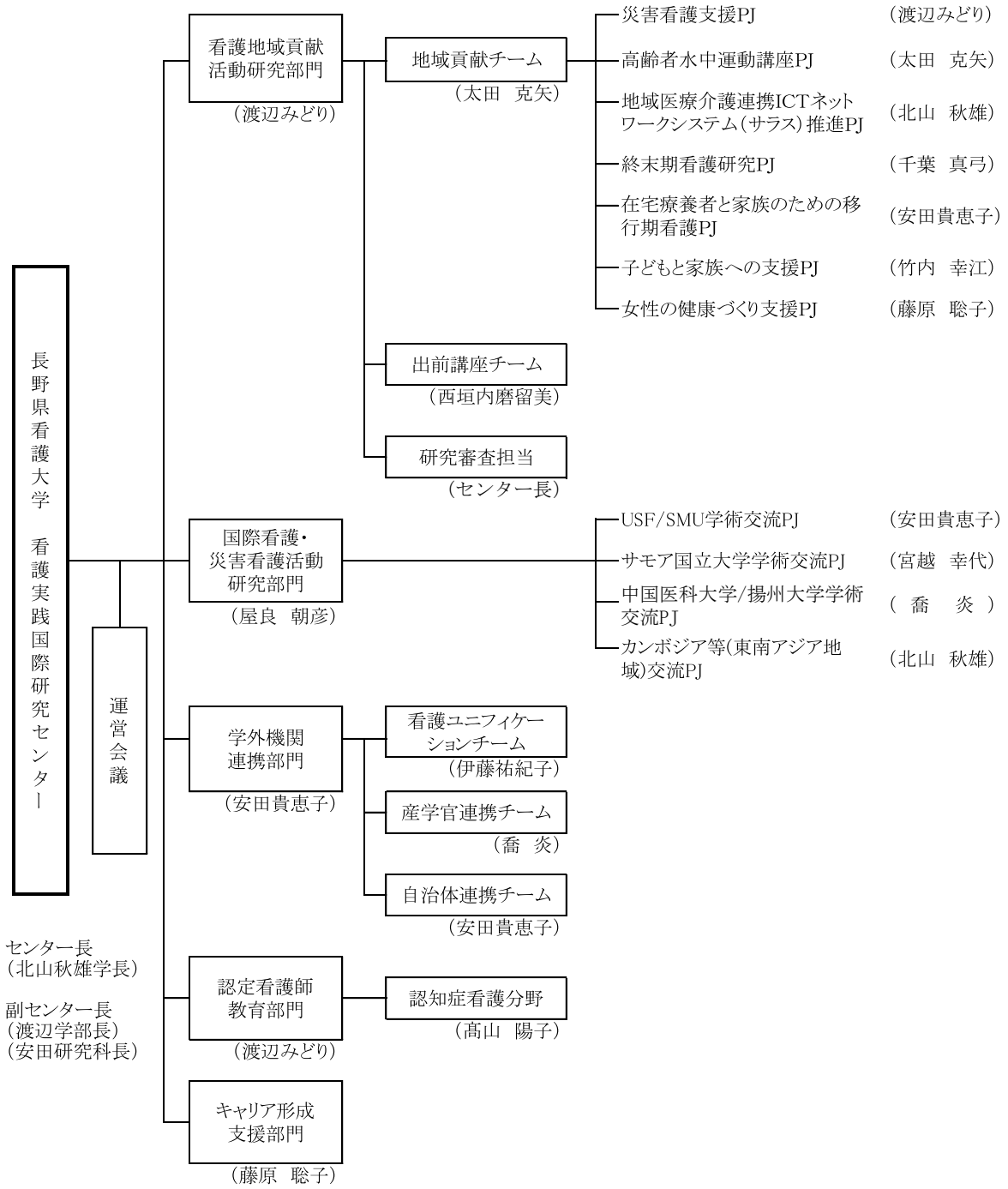
| | |
|---|---|
| センター長 | 学　長　　北山　秋雄 |
| 副センター長 | 教　授　　渡辺みどり(学部長)<br>教　授　　安田貴恵子(研究科長) |
| 部門責任者 | 看護地域貢献活動研究部門　　教　授　　渡辺みどり<br>国際看護・災害看護活動研究部門　准教授　　屋良　朝彦<br>学外機関連携部門　　教　授　　安田貴恵子<br>認定看護師教育部門　　教　授　　渡辺みどり<br>キャリア形成支援部門　　教　授　　藤原　聡子<br>（学生委員会 委員長） |

### ２　運営会議の構成

| | |
|---|---|
| 議　長 | 北山　秋雄(センター長) |
| 構成員 | センター長、副センター長、部門長（認定看護師教育部門を除く。）及び事務局長で構成。<br><br>渡辺みどり　（副センター長）（看護地域貢献活動研究部門長）<br>安田貴恵子　（副センター長）（学外機関連携部門長）<br>屋良　朝彦　（国際看護・災害看護活動研究部門長）<br>藤原　聡子　（キャリア形成支援部門長）<br>宮村　泰之　（事務局長） |

## ３　組織図

平成 30 年４月１日現在　（　）内は代表者



# 第２章　看護地域貢献活動研究部門

## 第１節　看護地域貢献活動研究部門の概要

部 門 長　渡辺みどり

### １　所掌事項

長野県を中心とした地域住民への、ケアの質ならびにウェルネス（最適な生活状態）の向上に繋がる実践的研究を実施し、県民の疾病予防や健康増進等に寄与する。

### ２　組織及び活動

地域貢献チーム、出前講座チーム、研究審査担当が活動を実施した。

(1)　地域貢献チーム　　リーダー：太田　克矢

地域貢献チームは 2017 年度からは７プロジェクトにより構成された。2018 年度のプロジェクトとその活動概要は下表のとおりである。

| プロジェクト名 | 活動概要 |
|---|---|
| 災害看護支援プロジェクト | 長野県内の防災・危機管理と住民の健康、医療における看護のあり方を検討する目的で行われている。駒ケ根市住民とともに避難所環境づくりなどの体験学習を行い 97 名の参加を得た。 |
| 高齢者水中運動講座プロジェクト | 地域高齢者のニーズにこたえるヘルスプロモーション活動を実践するため 1999 年より実施している。2018 年度の水中運動の延べ参加者数は 1600 名であり、身体測定会には 145 名の参加を得た。 |
| 地域医療介護連携 ICT ネットワークシステム（サラス）推進プロジェクト | 地域医療介護連携 ICT ネットワークシステム（サラス）を過疎地域で認知症の在宅医療、訪問看護、老健施設運営等に適用し Robot による認知症の予防と早期発見システム(SalusTalk)の開発に着手した。 |
| 終末期看護研究プロジェクト | 終末期における質の高いケアやケアシステムの在り方を看護の立場から考えようと活動している．高齢者の事前意思を明らかにする研究，認知症高齢者を介護する家族の日常生活での心配の相談事例の分析などを行った。 |
| 在宅療養者と家族のための移行期看護プロジェクト | 病院を退院して自宅に戻る“生活の場が移行する時期”に着目し、様々な健康問題を持つ人とその家族への支援を考察する。ことに退院移行期の看護活動支援に取り組んだ。 |
| 子どもと家族への支援プロジェクト | 健康や家庭環境に問題を抱える子どもと家族への支援を行うことを目的に、アレルギーをもつ子どもの親の会の自助サークルの支援、地域に向けた講演会・相談会を開催している。また、南信里親里子交流支援の会を通して家庭内養育を通して子どもの虐待防止のための取り組みを行った。 |
| 女性の健康づくり支援プロジェクト | 女性が自らの健康増進に関わる看護職者支援という視点から、養護教諭、性教育に携わる助産師を対象に「女性のからだを知る、特に月経や妊娠の仕組み、確実な避妊法などを中心に女性の QOL 向上、ライフプランを考える態度をつくる」というセミナーを行った。 |

(2)　出前講座チーム　　リーダー：西垣内　磨留美

県民に多様な学習機会を提供することを目的とし、2018 年度には出前講座を 9 回実施し、計 474 名が受講した。

(3)　研究審査担当　　リーダー：北山　秋雄

教員特別研究、県内看護職者との共同研究の審査を行った。

## 第２節　活動実績

### １　地域貢献チーム

### １　災害看護支援プロジェクト

リーダー：渡辺みどり
メンバー：安田貴恵子　安東由佳子　宮越幸代　千葉真弓　曽根千賀子　有賀智也
伊藤佑季

#### １　概　要

本プロジェクトは、長野県内の防災・危機管理と住民の健康、医療における看護のあり方を検討することを目的とする。具体的には、長野県内で想定される自然災害と住民の防災意識、健康との関連に着目した調査研究や事業を行い、看護職の役割や課題を明らかにする。

#### ２　活動実績

本学のグラウンドは駒ヶ根市における 3,040 名指定の緊急避難場所として、体育館は駒ヶ根市赤穂小学校区における想定収容人数 250 名の指定避難場所として機能することが期待され、駒ヶ根市との「災害時における協力体制に関する協定書」（平成 22 年 3 月 25 日）を取り交わしている。2017 年度に実施した駒ヶ根市Ａ区Ｂ町内防災訓練「避難所としての本学体育館視察」に引き続き、今年度は共同利用するＣ区Ｄ町内を加え、避難所開設時の初動に不可欠となる生活資材の取り扱いや深部静脈血栓症等をはじめとした「災害関連死」の予防対策についての演習を企画した。その目的は、災害時の避難所開設に関わる初動および運営について、２町内の住民が共同でより具体的な備えを進めるために、開設時に必要となる準備の一部を体験し、住民自身が必要な備えを検討した。

**実施日時**：平成 30 年 8 月 26 日（日）9:10～10:30

**参加対象**：駒ケ根市Ａ区Ｂ町内（約 80 戸）およびＣ区Ｄ町内（約 111 戸）計　約 600～700 名

**会場**：長野県看護大学体育館、学生ホール（当日、全館停電）＊トイレ、自販機、電灯全てが稼動しない

**体験内容**：

1. 避難所の環境づくりと臥床体験（パーテーション設置、安眠セットとダンボールベッドの作成および臥床体験）
2. 発電機の使用（発電機を発動し、投光機・ラジオ・扇風機を接続、稼動させる）
3. 排泄の備え（簡易トイレ・市販携帯トイレの実物展示、簡易トイレの組み立て・設置、自作トイレ作成体験）
4. 深部静脈血栓症予防（弾性ストッキングの着脱・歩行体験）

5. 経過別「非常持出袋」展示・意見交換（①直後に持ち出す物品、②静穏期に持ち出す物品、③職場等に備える物品）

**結果：**参加者は 97 名（内訳 A 地区 B 町内 35 名・C 地区 D 町内 55 名・本学 7 名）であり、いずれの企画においても住民の積極的な関心と参加が得られた。特に弾性ストッキングや手作りトイレ、非常持出袋においては「必要性はわかっていたが今回で具体的にわかったので、今後は自主的に備えたい」という積極的な行動変容を期待できる反応が得られた。また感想では、「緊急時はさらに混乱することを想定し、慣れない資機材の扱いを訓練しておくことの大事さ」、「夜間や停電時など暗い環境では組み立てが難しい資機材がある」、「今までに無かった２町内の共同が大事」などの結果が得られた。またダンボールベッドなど手当たり次第に、複数で組み立てたことによる失敗や、発電機など有事に重要な機材を稼動させるには定期的なメンテナンスが大変重要であることを実感する結果となった。

## ３　今後の課題

避難所の環境づくりの結果を駒ケ根市職員、住民と共有後、町内の防災会議などの機会を利用し、駒ケ根市の災害危険箇所に関する情報の共有、防災備品の共同申請などに取り組んでいく必要がある。さらに、今後も住民との共同により、避難所を運営・管理する住民が公助に頼らない自助・共助につなげる企画を継続し、駒ヶ根市のモデル的取り組みにつなげていく必要性が示唆された。

## ２　高齢者水中運動講座プロジェクト

リーダー：太田克矢

メンバー：【学内】松本淳子　有賀智也　細田江美　千葉真弓　屋良朝彦　青木駿介
長谷川志保　曽根千賀子　久保知奈津　井村俊義　座馬耕一郎
森野貴輝　御子柴裕子　上條こずえ　宮越幸代　那須淳子　江頭有夏
酒井久美子　下村聡子　富田美雪　田中真木　村井ふみ　近藤恵子
渡辺みどり　那須裕（名誉教授）
【学外】野口利香（運動指導士）　春日由美子　湯沢まゆみ

### １　概　要

1999 年 12 月の発足から 20 年目を迎える高齢者水中運動プロジェクトは、地域在住高齢者が参加する大きなプロジェクトとなっている。現在の会員数は約 90 名であり、2018 年度の延べ参加者数は約 1,600 名であった。地域で生活する高齢者が継続的に参加できる場の提供を長年行ってきている。

講座を月に 2～3 日の割合で開催（年 34 日）し、講座運営は地域からお手伝いに来てくださっている受付スタッフ 2 人と、運動指導士 1 人が毎回たずさわり、教員スタッフは 1 日あたり 4～6 人で分担して行っている。参加者は主体的に取り組んでおり、参加者の中で代表者や会計係も設けられ、これにより暑気払いや忘年会も毎年行われている。

講座のプログラムは、運動前に血圧測定と問診、水分補給を行った後、運動指導士のもとでプールサイドでの準備体操を行い、スイミングや水中ウォーキングを 60 分程度行う。運動後にも血圧測定と問診を行い、水分補給をしながら参加者同士の交流が図られている。運動時は、運動指導士以外にも、参加者の安全を見守る教員スタッフを配置する体制をとっており、運動中の大きなトラブルもなく過ごすことができている。毎回、参加者の方々は、笑顔でおしゃべりに花を咲かせるなど、地域の交流の場として機能している。

講座は、発足当時は1クラスであったが、参加登録者の増加に伴い、3クラス（午前の部、昼の部、午後の部）に分けて実施している。午前の部は、何年も講座に通っている方が主となり、自身の体力や能力に応じたスイミングを中心に自分のペースで行うことができる。昼の部と午後の部は、自身の体力に見合った水中ウォーキングを中心に行い、運動指導士から手厚い指導を受けることができる。2013 年度までは、新規の登録者は、1 年間は昼の部で水中での運動に慣れていただく体制であったが、2014 年度からは体力や能力、参加継続年数を問わず、誰でもクラスを選択できるようにした。3 クラスは、別々の時間帯（11 時～12 時、13 時 30 分～14 時 30 分、14 時 30 分～15 時 30 分）で行うため、参加者は自身の体力や生活時間に合わせやすくなり、継続的に参加できるように配慮している。今年度新規の登録者は21人おり、新しく参加を始めた方々が今後も元気に継続されることを期待したい。また、10 年以上継続して参加されている登録者は30人程おり、高齢者の健康づくりの場として機能している。

講座は、本学の老年看護学分野や認知症看護認定看護師教育課程の実習の 1 つとしても活用されている。核家族化に伴い、祖父母と同居した経験のない学生もいる。そのような学生にとっては、高齢者の自宅での過ごし方や健康の秘訣を伺うことで対象理解が深まる機会となっている。さらに、高齢者の方々にとっても、お孫さんと同じような年齢の学生と関わることは世代間交流の場ともなっている。

本プロジェクトでは、事業の一環として、毎年、骨密度測定大会（身体機能測定会）を開催し好評を得ている。身長・体重といった基本的な身体機能のほかに、筋肉量・脂肪量といった体組成、骨密度、老年期うつや認知症の簡易チェック等、多岐にわたる項目を測定している。骨密度測定大会は、毎年 150 人程の地域の方々に利用していただいており、継続的に参加される方も多い。計測後には、よろず相談の場を設けており、計測値から自身の生活を振り返っていただき、明日からの活力を見いだす場となるようにかかわっている。水中運動講座の登録者だけでなく、多くの方々の健康管理に役立てていただけるような活動としている。

本学は、開学以来、地域に根差した活動を教育と一体化して展開しており、今後も地域で生活する高齢者との交流を通じながら、地域貢献を行っていきたい。プール棟も築 20 年となり、昨年は屋根の一部損壊もあったが、今年度は修復工事を無事に完了し快適な環境のもとで活動ができている。今年度の大学基準協会による認証評価では、本プロジェクトは地域貢献に大きく寄与していると高評価を得ている。今後もプール棟を活用し、地域住民の健康づくりを支えていくために、事業データを整理して活用していく必要がある。

## ２　活動実績

### １）水中運動講座

本年度は、計 81 回のクラスを開催した（1 日 3 クラスを 24 回、1 日 1 クラスを 9 回）。月別の参加者人数は下記の表となる。このうち、18 クラスでは「学部の老年看護実習」としても展開した（5/16、6/13、7/11、10/3、10/31、11/28）。また、8 月には認知症の認定看護師教育課程（認知症看護分野）の実習も実施された（約 25 名）。

平成 30 年度

| | 4 月 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 午前 | 50 | 54 | 55 | 46 | 67 | 49 | 60 | 43 | 53 | 46 | 59 | 45 | 627 |
| 昼 | 44 | 51 | 44 | 33 | 55 | 54 | 61 | 35 | 51 | 60 | 59 | 40 | 587 |
| 午後 | 31 | 28 | 27 | 22 | 37 | 31 | 36 | 25 | 32 | 39 | 41 | 31 | 380 |
| 小計 | 125 | 133 | 126 | 101 | 159 | 134 | 157 | 103 | 136 | 145 | 159 | 116 | 1,594 |
| 学部・認定(概算) | 0 | 15 | 16 | 11 | 25 | 0 | 32 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 99 |
| 学生含めた計 | 125 | 148 | 142 | 112 | 184 | 134 | 189 | 103 | 136 | 145 | 159 | 116 | 1,693 |

学部・認定（概算）は、老年看護実習と認定看護師教育課程の実習生の人数

### ２）身体測定会（骨密度測定大会）

参加者人数：145 名（水中運動講座に参加していない地域の高齢者を含む）

## ３　今後の課題

講座は地域貢献事業として展開し大学から地域への貢献に大きく寄与しているものの、学内行事の増加に伴い運営スタッフの日程の確保が難しくなっている。これとともに、運営の主軸となるスタッフの育成も課題となっている。この結果、事業データを既存資料として利用する研究の推進に遅れが出ている。大学が展開する重要な地域貢献事業としての位置付けを学内に周知し、他の業務とのバランスに配慮していく必要がある。

## ３　地域医療介護連携 ICT ネットワークシステム(サラス)推進プロジェクト

リーダー：北山秋雄

メンバー：【学内】安田貴恵子　太田克矢　喬炎　清水嘉子　藤原聡子　千葉真弓
柄澤邦江　小野塚元子　秋山剛　三浦大志

【学外】金子仁子(慶応義塾大学)　渡邊泰秀(浜松医科大学)
縄秀志(聖路加国際看護大学)　北山三津子(岐阜県立看護大学)
高橋香子(福島県立医科大学)　難波貴代(神奈川工業大学)

【協力企業】ＥＮＷＡ(株)　(株)キッセイコムテック　(株)Ｗｅｂシェア
(有)キャリコ　医療法人社団ＫＮＩ(北原国際病院)

### １　概　要

本プロジェクトは、日本学術振興会科学研究費補助金をもとに構築された。里山における地域医療介護連携ＩＣＴネットワークシステム(サラス)の推進普及を目指している。

我々は、2013 年４月からへき地医療連携ネットワーク事業として、本県下伊那地域で最先端のＩＣＴ福祉タウンづくりに取り組み始め、2014 年１月から「阿南町医療介護連携ネットワーク推進事業」が本格始動した。今後少子高齢過疎化が進展する特に里山(へき地、島しょ等)において、サラスによる地域医療介護連携ＩＣＴネットワーク化を通して高齢過疎地域の再生･創生を後押ししたい。現時点で、本学が「里山看護・遠隔看護学分野」における世界のリーディング･カレッジであるが、これまでの地域との信頼関係･ネットワークをもとに栄村秋山郷の里山集落や県立阿南病院、中国揚州大学看護学院等の協力を得て、サラスの国内外における開発・普及を推進したいと考えている。

### ２　活動実績

今年度（平成 30 年度）は、研究対象過疎地域で認知症の在宅医療、訪問看護、老健施設運営等に取り組んでいる県立阿南病院において、サラスと連動した Robot との対話による認知症スクリーニング･チェックリスト(DASK21)を用いた、認知症の予防と早期発見システム(SalusTalk)の開発に着手した。これは、日常生活、健診時、診察時等の会話データを集積して、AI による認知症の評価法を開発する過程の研究である。

**認知症の予防と早期発見システム(SalusTalk)**

また、認知症高齢者オリエンティッドな離床探知と Vital Data(体温、脈拍、血圧、心拍数)収集が可能な機器の開発にＩＣＴ企業と協働して着手した。特に、現在のカメラによる 24 時間見守りシステムは「監視」のようにとられ拒否されることもあるので、新たに非カメラ、非接触型のドップラー(24GHz マイクロ波)センサによる見守りシステムの開発に取り組んだ。

**ドップラーセンサによる見守りシステム**

## ３　今後の課題

当面の課題は、AI(人工知能)を搭載したコミュニケーションロボット(SalusTalk)の開発である。特に、認知症予防・早期発見に特化したコミュニケーション能力の向上(会話フレーズの開発と蓄積等)がどの程度達成できるか否かにかかっている。その他、在宅高齢者の家族介護者のニーズの高い、サラスと連動した、非カメラ、非接触型のドップラー(24GHz マイクロ波)センサによる見守りシステム開発・普及にも取り組んでいる。

## 4　終末期看護研究プロジェクト

リーダー：千葉真弓
メンバー：渡辺みどり　柄澤邦江　細田江美　曽根千賀子　有賀智也　伊藤佑季
　　髙山陽子

### 1　概　要

本プロジェクトは、死を迎える人やその家族・友人、看護職者・介護職者を対象に終末期における質の高いケアやケアシステムの在り方を看護の立場から考えようと活動している。

これまで、介護老人福祉施設やグループホーム等、高齢者施設に入居する高齢者への終末期ケアを中心に、意思を尊重した看護方法や施設での看取りのための看護実践内容を明らかにしてきた。また、要介護状態となった際の、介護や生活に対する高齢者の事前意思を明らかにする研究、施設入所する認知症高齢者へのなじみの場づくりのための看護実践を明らかにする研究、認知症高齢者を介護する家族の日常生活での心配や困りごとについての相談事例を分析する研究活動などを実施してきた。

このように終末期ケアの重要な要素として日常生活支援と医療の提供をキーワードに、多方面から研究に取り組んでいる。

### 2　活動実績

#### (1)　認知症高齢者への終末期ケアに関する研究動向と認知症高齢者への終末期ケアに関する研究動向と課題

認知症者への終末期ケアにおける課題を明らかにする目的で文献検討を行った。検索キーワードを「認知症高齢者」、「終末期」、「看護」として絞り込んだ 34 文献を分析対象に、我が国における認知症高齢者の終末期ケアに関する研究の動向と課題について比較検討した。認知症高齢者の終末期ケアの論文は、介護施設での終末期ケアに関するものが多く、医療連携の体制整備と施設職員への精神的サポート、教育ニーズといった課題があり、これら課題への体制を整えている施設では終末期ケアの実施率が高いことが分かった。その一方で、医療現場での研究は少なかった。具体的なケア方法に関する研究では、経口摂取や症状緩和に関するものがみられ、看護師には、医療連携での中心的役割と日常生活支援、症状マネジメントが求められていた。意思決定支援では人工栄養、看取りの場に関する家族の代理決定支援を扱ったものが多かった。このことから、医療機関での終末期医療に対する意思決定支援や入院環境における生活支援、症状緩和に関する研究の必要性が明らかになった。

#### (2)　がん終末期独居高齢者の在宅看取りを可能とするための訪問看護の実践と医療・介護連携

**研究代表者：柄澤邦江　（平成 28-31 度　科学研究費　基盤研究 C）**

これまでの研究として、在宅で一人暮らしをする高齢者の看取りのための要件を明らかにした。その概要は、1. 本人の意思が明確であること、2. 主治医との関係が良好で十

分な協力が得られること、3.生活を支援してもらえるサポート資源を有していること、などであった。この結果を受けて、在宅療養者とその家族の思いに沿った看取りについて、訪問看護師との意見交換を実施した。「早期からの意思の確認」と、状況に応じて「その都度意思を確認する」ことや、患者を取り巻く「人的資源をアセスメント」し、患者の意向を共有して「医師との連携をとる」、経済的状況も加味した「ケアサービスの調整」を図るなどの看護実践への示唆が得られた。

さらに、訪問看護師が終末期独居高齢者の療養場所に関する意思を捉えたときの状況と支援について明らかにすることを目的に研究に取り組んだ。

Ｎ県訪問看護連絡協議会に登録されている南ブロックの訪問看護ステーションに勤務し、がん終末期独居高齢者への訪問看護経験を有する訪問看護師を対象とした。調査は半構成的な質問による面接調査とし、調査内容は、終末期独居高齢者に関わった事例をもとに高齢者の療養場所に関する意思をどのように捉えたか、その時の状況、捉えた意思に基づいて実施した支援について尋ねた。５名より研究協力が得られ、面接調査からは、「“最期まで自宅にいたい”という本人の明確な意思があった。」、「“入院したい”という本人の意思に添って緩和ケア病棟に入院した。」といった語りがみられていた。

また、がん終末期独居療養者のエンド・オブ・ライフケアに関する国内の過去５年の文献を検討し、エンド・オブ・ライフケアの６つの構成要素に関する看護実践を確認し、学会において報告した。

## ３　今後の課題

「がん終末期独居高齢者の在宅看取りを可能とするための訪問看護の実践と医療・介護連携」の研究においては、現在までに終えている５名の看護師への面接調査結果に加え、さらに対象を 20 名まで増やして調査を継続していく予定である。また、調査と同時に分析をしながら、がん終末期独居高齢者の意思確認と意思を尊重する看護実践内容を明らかにしていく予定である。

【学会発表】

千葉真弓、渡辺みどり：認知症高齢者への終末期ケアに関する研究動向と認知症高齢者への終末期ケアに関する研究動向と課題。第 31 回日本看護福祉学会学術大会、2018.7.29 駒ヶ根市。

柄澤邦江、安田貴恵子:独居がん療養者の看取りにおける訪問看護師の看護実践―エンド・オブ・ライフ・ケアの６つの焦点からの文献検討。第 13 回日本ルーラルナーシング学会学術集会。2018.11.3 高松市。

## ５　在宅療養者と家族のための移行期看護プロジェクト

リーダー：安田貴恵子
メンバー：小野塚元子　柄澤邦江　御子柴裕子　酒井久美子　村井ふみ　下村聡子　富田美雪
千葉真弓

### １　概　要

病院を退院して自宅に戻る“生活の場が移行する時期”は、療養者本人は心身の状態が不安定であるだけでなく、環境の変化によって自己管理の方法を模索する過渡的な時期でもある。また、家族にとっては、日常生活の中に介護を取り込むことが必要となる。本研究は、このような変化が伴う時期に着目して、様々な健康問題を持つ人とその家族への支援を考えるプロジェクトとして 2003 年に立ち上がった。

### ２　活動実績

【退院移行期の看護活動支援】

１）取り組みの経過

2010 年より、病院と地域を結ぶ看護師の役割を考えたいという要望を受けて取り組み始めている。相談を受けた当時は、医療法が改正され地域完結型医療を実現させるべく、医療介護連携の取り組みが始まっている状況であった。実践的な内容とするために、ワークショップ方式の研修を実施し、受講者の抱えている課題を明らかにしつつ、共同実施者[1)]と意見交換を重ねて PDCA サイクルを回しながら研修内容と方法を刷新してきている。

２）2018 年度の取り組み

【研修の目標】

①　医療機関利用者のニーズに対応した退院支援・退院調整の充実に向けて、自施設の退院支援・退院調整の現状と課題を明らかにすることができる。

②　①で挙げた課題解決のための、活動計画を考えることができる。

表１は、2018 年度の研修プログラムの内容である。

表１．研修プログラム

| | |
|---|---|
| １日目 | ・自己紹介、アイスブレイク<br>・自施設の退院支援の体制・現状整理とグループ共有<br>・退院支援を必要とする社会背景<br>・退院支援のプロセスの概要 |
| ２日目 | ・退院支援プロセスを構成する技術的な内容<br>・退院支援に有用な対応技術（ロールプレイなど）<br>・模擬事例を用いた援助課題の検討（2018 年度新たに追加）<br>・自施設の課題整理とグループ共有 |

３）研究の成果

研修を行うにあたり、研修受講者より研修の成果を把握するためにアンケートに協力

いただきたいこと、研究集会での公表に使用することの可否について了解を得た。表１～５は公表に許可の得られた回答結果である。

表１．退院支援・退院調整のプロセスの理解 n＝43

| 退院支援･退院調整のプロセスの理解 | 人数(人) | 割合(%) |
|---|---|---|
| よく理解できた | 15 | 34.9 |
| ほぼ理解できた | 27 | 62.8 |
| あまり理解できていない | 1 | 2.3 |
| まったく理解できていない | 0 | 0.0 |
| 合計 | 43 | 100.0 |

表２．退院支援・退院調整の具体的な理解 n＝35

| 具体的な理解 | 人数(人) | 割合(%) |
|---|---|---|
| よく理解できた | 11 | 31.4 |
| ほぼ理解できた | 23 | 65.7 |
| あまり理解できていない | 1 | 2.9 |
| まったく理解できていない | 0 | 0.0 |
| 合計 | 35 | 100.0 |

表３．グループ内での交流　n＝43

| グループ内での交流 | 人数(人) | 割合(%) |
|---|---|---|
| よくできた | 21 | 48.8 |
| ほぼできた | 19 | 44.2 |
| あまりできていない | 2 | 4.7 |
| まったくできていない | 0 | 0.0 |
| 未記入 | 1 | 2.3 |
| 合計 | 43 | 100.0 |

表４．患者・家族とのコミュニケーション方法の理解

n =35

| コミュニケーションの方法の理解 | 人数(人) | 割合(%) |
|---|---|---|
| よく理解できた | 17 | 48.6 |
| ほぼ理解できた | 17 | 48.6 |
| あまり理解できていない | 1 | 2.8 |
| まったく理解できていない | 0 | 0.0 |
| 合計 | 35 | 100.0 |

表５．自職場または自己の課題の明確化と行動計画

n＝35

| 行動計画をたてる | 人数(人) | 割合(%) |
|---|---|---|
| よく理解できた | 6 | 17.1 |
| ほぼ理解できた | 24 | 68.6 |
| あまり理解できていない | 4 | 11.4 |
| まったく理解できていない | 0 | 0.0 |
| 未記入 | 1 | 2.9 |
| 合計 | 35 | 100.0 |

集計結果より、退院支援・退院調整のプロセスや支援要素の具体的な理解が進んだことが確認された。また、機能の異なる病院の様子を知ることや、プロセス全体を俯瞰できるようになることによって、自施設の退院支援・退院調整の現状を見渡すことができるようになっていた。

1)長野支部看護師分科会北信地区看護連携協議会（会長：小林聖子氏（長野松代総合病院））と協働で行っているものである。

## ３　今後の課題

提供体制の変化を受けて、退院移行期の支援に対する支援体制は、当プロジェクトを開始した当時と比べると、各段に高まってきている。退院支援・退院調整が効果的に機能することは、ケアの継続性を担保するために重要な要素である。

## ６　子どもと家族への支援プロジェクト

リーダー：竹内幸江
メンバー：秋山剛　足立美紀　髙橋百合子　白井史　安田貴恵子　御子柴裕子　柄澤邦江
下村聡子　酒井久美子　村井ふみ　富田美雪

### １　概　要

このプロジェクトは、健康問題を抱える子どもとその家族への支援を考えることを目的としている。平成 30 年度の活動内容は以下の２つである。

１）アレルギーをもつ子どもの親の会：アレルギー疾患の子どもをもつ親への支援として自助サークルにかかわり、情報交換、学習会を行っている。月１回の交流会、および年１回の地域に向けた講演会・相談会を開催している。

２）南信里親里子交流支援の会：長期的視点から家庭内養育を通して子どもの虐待防止に寄与することを目指して、里親同士の交流を通じた支援を検討している。月１回の交流会にかかわり、情報交換、事例検討等を行っている。

### ２　活動実績

１）アレルギーをもつ子どもの親の会

（１）定例会

| | 月　　日 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 第１回 | ５月１日（火） | 今年度の活動方針　健康福祉大会参加の検討 |
| 第２回 | ６月５日（火） | 健康福祉大会参加に向けて内容の検討 |
| 第３回 | ７月３日（火） | 近況報告 |
| 第４回 | ９月４日（火） | 情報交換<br>健康福祉大会の報告　講演会に向けての準備 |
| 第５回 | 10 月２日（火） | 近況報告　講演会に向けての準備 |
| 第６回 | 11 月６日（火） | 近況報告　講演会に向けての準備 |
| 第７回 | 12 月４日（火） | クリスマス会 |
| 第８回 | ２月 18 日（月） | 近況報告　講演会のアンケート集計 |
| 第９回 | ３月５日（火） | 会報作成　近況報告 |

（２）個別相談

メールおよび電話による相談に対応した。

| 月 | 件数 | 相　　談　　内　　容 |
|---|---|---|
| ６月 | １件 | 県内への転居を控え、アレルギー専門医への受診について |
| 11 月 | １件 | 食物アレルギー児の予防接種について |
| ２月 | １件 | 食物アレルギー児の日常生活環境と定例会について |
| ３月 | １件 | アトピー性皮膚炎児の日常生活管理と定例会について |

（３）第５回飯島町健康福祉大会参加

上伊那郡飯島町健康福祉課からの誘いで、相談ブースを出した。20 名程度の来訪者があり、アトピー性皮膚炎の日常生活管理や、食物アレルギーに関する相談を受けた。

【大会でのブース】

（４）講演会

下記の内容で講演会を実施した。

日時：平成 30 年 12 月 15 日（土）13：30～16：00

場所：長野県看護大学

テーマ：アレルギーを持つ子どもと家族が楽しく、安全に安心して生活するために

「親の立場から」小林由里（親の会会員）

「再確認！子どものアレルギーの基本と対応～エピペン徹底解説～」

加賀田真寿美（小児看護専門看護師/小児アレルギーエデュケーター）

【講演会】

２）南信里親里子交流支援の会

（１）定例会

| | 月　　日 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 第 1 回 | 4 月 16 日（月） | 今年度の活動方針・情報交換 |
| 第 2 回 | 5 月 21 日（月） | 近況報告、事例検討 |
| 第 3 回 | 6 月 18 日（月） | 事例検討 |
| 第 4 回 | 7 月 23 日（月） | 平成 30 年度第 8 回交流会(2018/9/1)の準備等について |
| | 9 月 1 日（土） | 第 8 回夏レクリエーション親子交流会　於：駒ヶ根市家族村　（日帰りキャンプ） |
| 第 5 回 | 10 月 15 日（月） | 意見交換・交流会(2018/9/1)の報告 |
| 第 6 回 | 11 月 19 日（月） | 意見交換 |
| 第 7 回 | 12 月 17 日（月） | 近況報告 |
| 第 8 回 | 2 月 18 日（月） | 意見交換、日本子ども虐待防止学会　信州大会 5 周年記念シンポジウムについて |

（2）研究・地域貢献活動

- 平成 30 年 9 月 1 日に里親・里子交流会「第 8 回親子交流会」を開催した。
  大人 21 名、子ども 8 名が出席した。
- シンポジウム開催について、「長野子どもを虐待から守るネットワーク」の一員として企画に参加・協力した。

➢ 日本子ども虐待防止学会　第 19 回学術会議
信州大会開催 5 周年記念シンポジウム：「子どもの死を防ぐために、いま私たちのできることーCDR(チャイルド・デス・レビュー)の実現を目指してー」
日時：平成 31 年 2 月 24 日（日）14：00～16：30
場所：松本市中央公民館（Mウイング）3-2 会議室

【第 8 回親子交流会】

【平成 31 年 2 月 24 日開催シンポジウム】

## 3　今後の課題

交流会、自助グループにかかわりながら、さらに会員のニーズを把握し、支援方法を検討していく。また、会員数が減少してきているため、それぞれの活動内容を地域に発信し、理解を求めると同時に、継続していくための方略を考えることも必要である。

## 7　女性の健康づくり支援プロジェクト

リーダー：藤原聡子
メンバー：西村理恵　佐々木美果　水主洋子　井出沙織　林陽子　藤井あゆみ
　　安田貴恵子

### 1　概　要

H30 年度「女性の健康づくりプロジェクト」は、昨年度の性感染症予防セミナーに引きつづいて、「女性の性の健康」を目的とし、対象を大学生（2 年生 84 名）とした講演形式で行った。また、日頃の性教育に携わる地域の方々へのブラッシュアップとして、駒ヶ根市内の小中の養護教諭複数名、性教育に携わる駒ヶ根市内在住の助産師複数名にも参加を呼びかけた。セミナー講演の内容と目標は「女性のからだを知る、特に月経や妊娠の仕組み、確実な避妊法などを中心に女性の QOL 向上、ライフプランを考える態度をつくる」である。

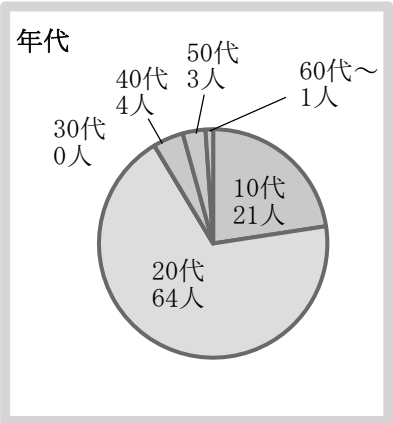
必修科目「母性看護方法Ⅰ」中の 1 コマを使って行い、公開講座（資料用意のため人数は総計 110 名程度まで）とした。この活動は日本家族計画協会「平成 30 年度女性のための健康応援セミナー講演」の助成により実現した。

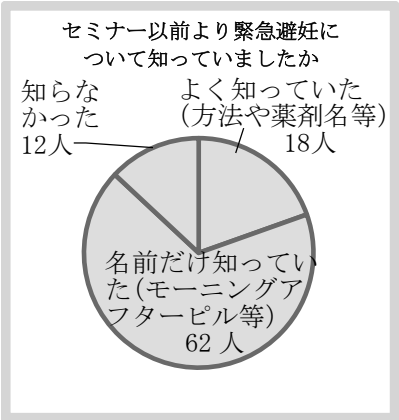
### 2　活動実績

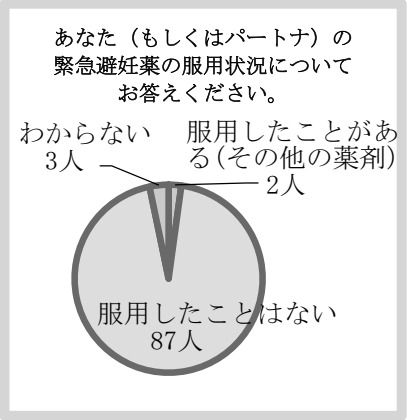
1)　開催日時：平成 30 年 12 月 19 日（水）16:20～17:50
2)　場所：本学　大講義室
3)　講師：北村邦夫　先生
　　（一般社団法人　日本家族計画協会理事長・家族計画研究センター所長）
4)　・講義の対象者：2 年次生 84 名
　　・セミナー見学を呼び掛けた対象者：
　　駒ヶ根市内の小中の養護教諭、駒ヶ根市健康推進課・子ども課担当、性教育に携わる駒ヶ根市内在住の助産師、性の健康教育等に携わる駒ヶ根市近郊自治体に居住の教職員
5)　広報の方法：
　H30 年 10 月 31 日までに、駒ヶ根市立赤穂南小学校、駒ヶ根市立赤穂小学校、駒ヶ根市立赤穂東小学校、駒ヶ根市立中沢小学校、駒ヶ根市立東伊那小学校、駒ヶ根市立赤穂中学校、駒ヶ根市立東中学校の 7 校に向けて、学校長宛の公文書で、校長から養護教諭に向けて講義聴講の依頼文を郵送した。また、日本助産師会の長野県支部会長を通じて、地域の助産実習に関わる開業助産師に広報していただいた。
6)　最終的なセミナー見学者数と属性：
　養護教員 1 名、開業助産師 2 名、その他助産師 4 名、母子保健教育者 1 名、JICA 母子保健プロジェクト関係者 1 名の計 9 名
7)　セミナー受講後のアンケート調査
　受講後対象学生は、公開講義の感想について自由記述した。また、駒ヶ根市内の小中の養護教諭、性教育に携わる駒ヶ根市内在住の助産師などに広報して 9 名が参加し、授業終了後

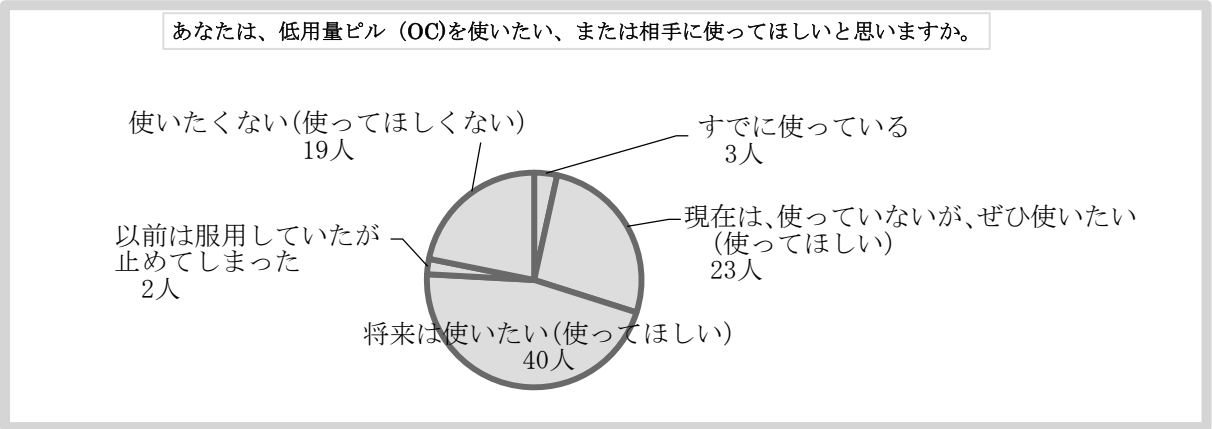
に日本家族計画協会のアンケートのほか、①授業への感想、②企画に対する感想、③今後の企画への要望をアンケートに記入してもらい、PJ メンバーとともに、受講後のフリートークを行った。

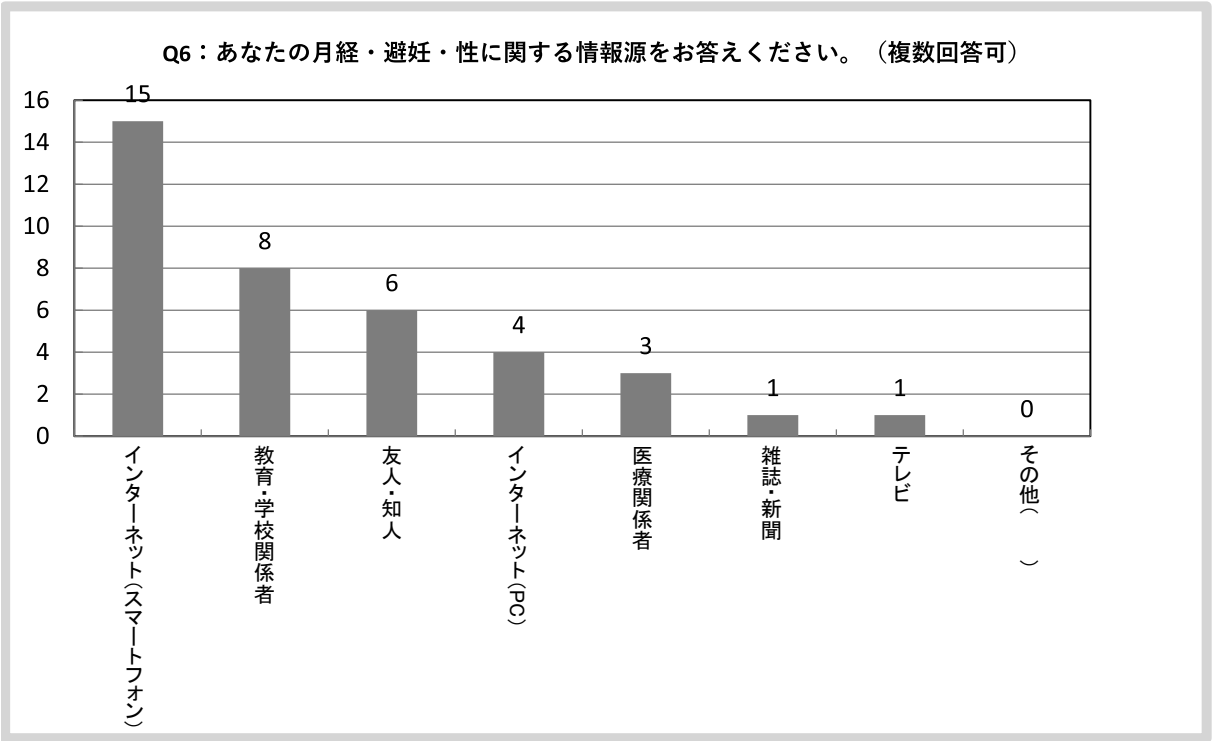
8)　日本家族計画協会のセミナー受講者へのアンケート実施結果（一部）



参加者の感想（自由記述の一部）

| No. | 年代 | 感想 |
|---|---|---|
| 1 | 10 | ・女性の避妊に対する考えが変わった。 |
| 2 | 20 | ・恥かしくて話せないようなお話をおもしろく話してくださり、楽しかった。 |
| 3 | 10 | ・とても楽しく、知りたい部分が知れた。<br>女性だけでなく男性にも聞いてほしいセミナーだった。 |
| 4 | 10 | ・勉強になった。 |
| 5 | 20 | ・今、自分が考えなければならないことがわかりました！ |
| 6 | 20 | ・貴重なお話有難う。正しい知識を得て自ら選択していくことが大切だと思った。 |
| 7 | 20 | ・ピルをもっと使っていい世の中になればいいと思った。児童虐待について話を聞きたい。 |
| 8 | 10 | ・今までの価値観が変わりました。 |
| 9 | 40 | ・本当に well－being を考えることができた。 |
| 10 | 10 | ・なぜ日本だと性についてはタブー視されるのか。 |
| 11 | 20 | ・妊娠/出産についてくわしく学べた。ノルレボ錠など知れてよかった。 |
| 12 | 40 | ・熱の入ったメッセージをありがとうございました。 |
| 13 | 20 | ・北村先生のティーンズボディを使用して学校で性教育を行っている。<br>その先生から直接お話を聞けて、冊子よりもとても勉強になった。 |
| 14 | 10 | ・避妊に対しての考え方が変わった。 |

## ３　活動の成果

セミナー講演の内容は「女性のからだを知る、特に月経や妊娠の仕組み、確実な避妊法などを中心に女性の QOL 向上、ライフプランを考える態度をつくる」である。

授業後の学生からは、7)-①について「避妊や中絶について、統計データや実際の患者例を通して聴講できたので、身近な問題として危機感を持って聞けた。」「性について自分で選択をしていくことが必要だということが理解できた。」という感想が多かった。

一般参加からは、7)-③について今後も同様のセミナー開催についての要望があった。

当日のセミナーについては学生、一般参加ともに非常に集中力が高く、好評を持って迎えられた。講演終了数日後、聴講した養護教諭から「このセミナーの内容を参考にし、実際に自分でも性教育の授業を行ったが、生徒達は興味深く聴いてくれた。私を介して次世代の若者に伝えられたことは、とても大きな収穫だったと思う。」という言葉があり、セミナーが性教育の実践に活用され、地域貢献の実績になったと考える。

## 2　出前講座チーム

リーダー：西垣内磨留美
メンバー：坂田憲昭（副リーダー）　安東由佳子　浦野理香　三浦大志　足立美紀
酒井久美子　佐々木美果　有賀智也　上條こずえ　宮村泰之（事務局長）

### 1　概　要

長野県民の要望に応え、本学の教員が各々の専門性を活かした講座を学外で実施することにより、学習機会を提供し、地域に貢献することを目的とした講座制度に関わるシステムの運営と広報を担当している。具体的には、講座内容の取りまとめと広報、依頼の把握、問題発生時のサポート、主催者向けアンケートの作成と集計、システムの再検討などである。

講座の開催に関する流れとしては、主に、パンフレットの配布、各団体からの申し込み、主催者と講師との調整、講座開催、主催者アンケートの回収、講師の実施報告で構成される。

平成 28 年度にチームの活動を開始し、平成 29 年 10 月より、学外での講座の開催を開始した。平成 30 年度の出前講座の登録演題数は 49 題であり、9 件の講座を開催した。

### 2　活動実績

平成 30 年度の出前講座の開催実績は以下の通りである。

1）テーマ「**命を守る技術、いまむかし、そして世界のあちこち**
**～基礎看護技術　バイタルサインズの測定～**」
講師：宮越幸代准教授　　主催団体：飯田高校　　参加人数：57 名
日時：平成 30 年 9 月 14 日 13：00～16：00

2）テーマ「**他者への関心～それが看護の原点～**」
講師：伊藤祐紀子教授　　主催団体：　赤穂高校　　参加人数：32 名
日時：平成 30 年 9 月 27 日 13：30～14：30

3）テーマ「**他者への関心～それが看護の原点～**」
講師：伊藤祐紀子教授　　主催団体：長野西高校　　参加人数：29 名
日時：平成 30 年 10 月 25 日 13：00～16：00

4）テーマ「**人と仲良くする方法　交渉学入門**」
講師：屋良朝彦准教授　　主催団体：飯田風越高校 参加人数：69 名
日時：平成 30 年 11 月 15 日 13：50～15：40

5）テーマ「**カイロプラクティックによる骨盤健康教室**」
講師：熊谷理恵助教　　主催団体：宮田小学校　　参加人数：30 名
日時：平成 31 年 1 月 9 日 10：30～11：30

6）テーマ「**骨盤を整えよう！カイロプラクティックでボディメイク**」
講師：熊谷理恵助教　　主催団体：子育てサークルひらけごま　　参加人数:25 名
日時：平成 31 年 2 月 7 日 10：30～12：00

7）テーマ「**アロマオイルを用いたマッサージ**」
講師：熊谷理恵助教　　主催団体：赤穂公民館　参加人数：12 名
日時：平成 31 年 2 月 14 日 9：30～11：15

8）テーマ「**いのちの大切さについて考える**」
講師：竹内幸江准教授　　主催団体：飯田市立旭ヶ丘中学校　参加人数：184 名
日時：平成 31 年 2 月 28 日 15：00～15：50

9）テーマ「**他者への関心～それが看護の原点～**」
講師：伊藤祐紀子教授　　主催団体：木曽青峰高校　　参加人数：36 名
日時：平成 31 年 3 月 14 日 10：00～13：00

平成 30 年度は、474 名もの受講者があり、主催者アンケートでは、「大いに刺激を受けた」、「魅力的な講義であった」、「大変有意義な研修であった」、「講義を受け、改めて看護系の進路にしようと思った」、「看護という仕事への理解が生まれた」などの感想が寄せられ、主催団体や受講者から好評を得た。

講師からは、連絡や準備など主催者から良い対応が得られたことが報告され、滞りなく開催されたことが確認できた。「大学で担当している講義にも活かせる」といった報告もあり、講師にとってもメリットがあることも確認された。

また、講師の配慮によって本学の大学案内やオープン・キャンパスのチラシを配布する機会としても機能し、大学全体の広報につながった。

出前講座制度は着実に歩みを重ねているといえるだろう。

## 3　今後の課題

出前講座制度の運営と広報を円滑に行うことが第一の目的となる。加えて、主催者、講師ともに、より活動しやすくなるよう、改善を視野に入れ活動していく。平成 30 年度は高校や小中学校など学校関係からの要望が多数を占めたが、より幅広い受講者層に講座を提供できるよう、検討を行なう。

## 3　研究審査担当

リーダー：北山秋雄（センター長）
メンバー：渡辺みどり（副センター長）　安田貴恵子（副センター長）
屋良朝彦（部門長）　藤原聡子（部門長）　宮村泰之（事務局長）

### 1　概　要

教員特別研究、県内看護職者との共同研究の審査を行う。

(1) 教員特別研究の内容

| | |
|---|---|
| 要　件 | 一般研究（個人配分）の枠を越えるものであり、本県の保健・医療・福祉の発展に寄与する、より実践的・学術的な研究成果が得られるもの。 |
| 種　目 | ア）特別A研究<br>分野を越えた研究<br>長野県の保健・医療・福祉の発展に寄与する研究<br>イ）若手研究<br>39 歳以下の研究者が単独で行う研究<br>ウ）課題研究<br>本学が直面する緊急的な課題の研究 |
| 採　択 | 採択は、予算の範囲内で決定する。なお、予算が限られているため、科研費等外部資金の積極的な活用に努めることとする。 |
| 期　間 | 研究期間は、原則として単年度とする。なお、特例として1年間の延長を認める。 |
| 経　費 | 1研究当たりの研究費は、原則として次のとおりとする。なお、海外出張及び備品購入に係る経費は、対象外とする。<br>ア）特別A研究　100 万円以内<br>イ）若手研究　　50 万円以内<br>ウ）課題研究　　100 万円以内 |

(2) 県内看護職者との共同研究の内容

| | |
|---|---|
| 目　的 | 県内の看護現場等で働く看護職者が、臨地における諸課題の解決に向け、自ら提案する研究テーマについて、本学の人的資源等を活用して、共に調査・研究に取り組むことにより、地域の看護・保健・医療の発展に寄与することを目的とする。 |
| テーマ数 | 本学の特別研究として取扱い、実施する研究テーマ数は毎年度2件程度とする。 |
| 期　間 | 2年度以内とする。 |
| 経　費 | ア）原則として、本学が負担する。（経理は本学において行う）<br>イ）1研究テーマにつき、1年度当たり 500,000 円以内とする。<br>（研究期間が2年度にわたる場合は 500,000 円×2年度＝1,000,000 円以内） |

## 2　活動実績

(1) 平成 31 年３月５日

平成 31 年度の教員特別研究、県内看護職者との共同研究について審査を行った。

| | 応募状況（金額） | 採択（交付金額） |
|---|---|---|
| 教員特別研究<br>特別 A 研究 | 3 件　1,398 千円 | 3 件　1,319 千円 |
| 県内看護職者との共同研究 | 2 件　174 千円 | 2 件　174 千円 |

**【令和元年度】　1　教員特別研究**

（単位：千円）

| 区分 | 種目 | 研究課題 | 研　究　者（　○は代表者　） | 研究期間 | 交付金額 |
|---|---|---|---|---|---|
| 新規 | 特別A | パーキンソン病患者の疾病自己管理方略に関する研究　～Apathyに注目して～ | ○安東教授<br>金子教授　熊谷助教　伊藤助手<br>青木助手　長谷川助手 | R元～2 | 283 |
| | | 「ブルーライト法」と「ガラス板圧診法」の融合による褥瘡早期診断装置（産業技術総合研究所との共同開発）の検証 | ○喬教授<br>三浦助教　北山教授 | R元 | 568 |
| | | 集団歌唱が健康及び向社会性に及ぼす効果 | ○松本准教授<br>竹内准教授<br>山崎教授（大阪樟蔭女子大）<br>岡田理事長（NPO法人音楽で日本の笑顔を）<br>佐藤副理事長（NPO法人音楽で日本の笑顔を） | R元～2 | 468 |
| 計 | | | | | 1,319 |

**2　県内看護職者との共同研究**

（単位：千円）

| 区分 | 研究課題 | 研究代表者及び担当教員（代表） | 研究期間 | 交付金額 |
|---|---|---|---|---|
| 継続 | 高齢者への誤嚥予防ケアの実態と地域連携にむけての課題　～地域中核病院と訪問看護ステーションとの連携に焦点をあてて～ | ○伊那中央病院　池上敦子<br>伊藤教授　那須助教 | H30～R元 | 76 |
| 新規 | 維持血液透析患者の最期に関する患者家族の思い | ○伊那中央病院　江口美晴<br>伊藤助教 | R元～2 | 98 |
| 計 | | | | 174 |

# 第３章　国際看護・災害看護活動研究部門（ＩＲＣ）

## 第１節　国際看護・災害看護活動研究部門（ＩＲＣ）の概要

部 門 長：屋良朝彦
メンバー：宮越幸代　座馬耕一郎　村井ふみ　喬炎　渡辺みどり　安田貴恵子　藤原聡子
井村俊義　秋山剛　御子柴裕子　柄澤邦江　中畑千夏子　近藤恵子　島袋梢
髙橋百合子　田村かおり　下村聡子　田中真木

### １　概　要

長野県看護大学は、1995 年の開学以来、教育研究目標のひとつとして、国際的な視野を持って教育研究活動し国内外の看護学の発展に寄与できる人材育成を掲げてきた。そうした背景から 2002 年 3 月、International Research Center in Cross-Cultural Nursing (IRC) は、本学の多文化・国際看護と健康に関する教育研究を支援する拠点として設立された。2002 年 12 月には､看護実践国際研究センターの設立を機に｢異文化看護国際研究部門｣に、平成 28 年から災害看護を加えて｢国際看護･災害看護活動研究部門｣(International Research Center in Cross-Cultural and Disaster Nursing)に組織替え・名称変更を行い、活動内容の拡充を図ってきた。

### ２　活動実績

昨年度に引き続き、今年度も”Challenge to Change(変革への挑戦)”をスローガンに掲げて、海外から３件の視察研修を受け入れたほか、４つのプロジェクトの活動を展開してきました。とくに、これらの活動を促進するために、６月には中国揚州大学看護学院と、８月にはサモア国立大学と覚書（MOU）を締結した。

加えて、JICA 駒ケ根訓練所(KTC)および JOCA（公益社団法人青年海外協力隊）との協力関係を探索してきた。また、海外への情報発信力を高めるために、英語版のウェブサイトの拡充および、パンフレットの作成を手掛けている。

なお、駒ケ根市ネパール交流市民の会の活動支援の詳細は、自治体連携チームの報告に記載した。

### ３　今後の課題

本学の所在地である駒ケ根市には｢JICA 駒ケ根訓練所｣があることや｢国内外の教育研究機関との共同研究や看護実践活動をとおしてグローバルな視野を持った人材を育成し看護学全体の発展に寄与すること｣が本学の開学以来の教育目標のひとつであることから、IRC が中心となってより一層国際看護と災害看護における教育研究を推進するとともに、その活動の広報と成果の発信が課題となっている。そのために、本学英語版ウェブサイトの拡充とパンフレットの作成に着手している。

## 第２節　活動実績

### １　ＵＳＦ/ＳＭＵ学術交流プロジェクト

リーダー：安田貴恵子
メンバー：田中真木　渡辺みどり　秋山剛　髙橋百合子　有賀智也

**１　Samuel Merritt University　Richard Macintyre 教授の招聘（2018 年 7 月 27 日～8 月 5 日）**

2015 年度より、看護海外研修では Samuel Merritt University(SMU)を訪問している。2018 年度は学術交流として、Richard Macintyre 教授（PhD, RN, FAAN）を招聘した。

7 月 29 日には、第 31 回日本看護福祉学会学術大会（大会長　本学成人看護学分野　安東由佳子教授）と長野県看護大学との共催による市民公開特別講演において、ご講演をいただいた。北山秋雄学長、秋山剛講師が司会をされ、講師のご紹介のあと、「カリタス・プロセスとマインドフルネスを活用したストレスへの対処」というテーマでご講演をいただいた。看護学教育のカリキュラムの中にマインドフルネスの方法を取り入れたストレスマネジメントを位置付け、それを実際に展開されていること、そのカリキュラムの構成は SMU だけでなく、カリフォルニア州の他の教育機関においても取り入れられてきていることについてお話しを伺うことができた。

**２　2018 年度看護海外研修**

2019 年 2 月 23 日～3 月 2 日の行程にて行われる。この学術交流は、2003 年度から始まり、16 回目となる。主たる訪問先は、University of San Francisco (USF)と Samuel Merritt University (SMU)である。

(1)　研修先

University of San Francisco　(USF)

サンフランシスコ大学は 1855 年にカトリックのイエズス会の伝統に基づいて創立された大学で、人文科学、ビジネス経営学、教育学、法学、看護学の各学部を有する私立大学。看護学部の学生数は、約 580 名で、修士・博士課程を有する。博士課程に APN(Advanced Practice Nurse)の上級に位置づけられる、実践を重視した DNP (Doctor Nursing Practice) コースを設けている。

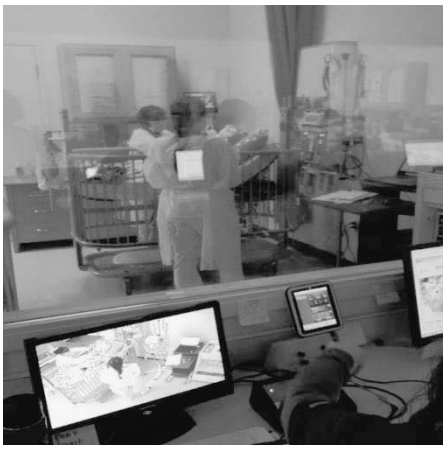
Samuel Merritt University　(SMU)

1909 年に設立されたアメリカ西海岸を代表するヘルスサイエンス系大学であり、医学、看護学、作業療法、理学療法、医師補助（Physician Assistant）などの学部を持つ。看護学は Family NP を中心に博士課程までの教育を行っている。

(2)　研修の内容

| 日時(曜日) | | 内　　容 |
|---|---|---|
| 2 月 23 日 | 土 | 駒ケ根→羽田発(19:45)→　サンフランシスコ着(現地時間　12:10) |
| 2 月 24 日 | 日 | オリエンテーションと現地打ち合わせ |
| 2 月 25 日 | 月 | サンフランシスコ大学看護学部<br>7:30　　学部長・副学部長への挨拶<br>7:55-11:35　授業への参加<br>12:30-3:00　看護技術演習室見学　　大学院修了生・教員プレゼンテーションと意見交換<br>3:00-4:00　キャンパスツアー |
| 2 月 26 日 | 火 | サミュエルメリット大学オークランドキャンパス<br>10:00　シミュレーションセンター見学<br>10:15　学部長挨拶<br>10:30　講義と意見交換(看護倫理)<br>11:30　講義と意見交換(ケースマネジメント)<br>1:30　講義と意見交換(アメリカのヘルスケア施策の課題)<br>2:30 講義と意見交換(マインドフルネス)<br>3:30　講義と意見交換(シミュレーション教育の理念と方法) |
| 2 月 27 日 | 水 | サンフランシスコ大学看護学部<br>7:35-11:35　授業への参加<br>12:30-3:00　シミュレーションセンターの見学とスタッフとの意見交換 |
| 2 月 28 日 | 木 | Anne 先生訪問、老人ホーム見学・Nursing Facility の見学 |
| 3 月 1 日 | 金 | サンフランシスコ(15:00)→　3/2(土)　羽田(日本時間 19:15) |

ＵＳＦのシミュレーション教育場面



ＳＭＵオークランドキャンパスの
シミュレーションセンター

## ２　サモア国立大学学術交流プロジェクト
## （サモア国立大学との学生間交流事業）

リーダー：宮越幸代
メンバー：下村聡子　島袋梢　御子柴裕子

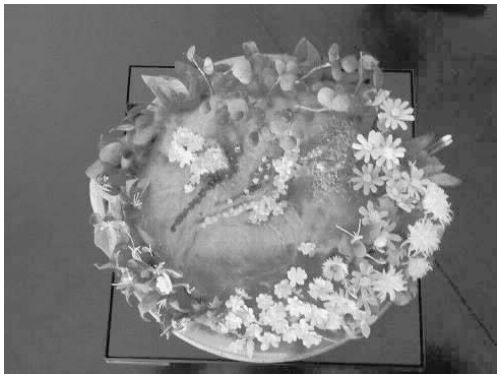
本学とサモア国立大学（NUS ： National University of Samoa）の間で、学術交流協定が締結（2001 年）されて以来、NUS との国際看護実習（2004 年開始）は 14 年の歴史を積み重ねてきた。この実習は隔年度ごとに互いの国に 2 週間程度滞在し、現地の医療や看護、文化を学ぶ短期交換留学の方法で行われてきた。平成 30 年度現在、本学でこの実習を履修した学生（本学渡航年度および来日留学生受入年度を合わせて）は累計 48 名（平成 31 年 2 月履修生 3 名を含む)、本学に来学した NUS 留学生は累計 14 名である。本学の既卒国際看護実習生の中には、数年の臨地経験を積んだ後、国際協力活動に参加し、帰国後にその経験を活かして活躍する卒業生が国内外に複数いる。特に NUS 留学生の来日年の実習は、県内外各地にいるこれらの既卒実習生らの支援があってこそ、有意義かつ友好的に続けることができてきた。また、既卒実習生には、この 20 年以上もの歴史と絆が育まれてきた本学独自の実習だからこそ得られた力を十二分に発揮し、国内外の看護や市民活動に還元してくれることがますます期待される。

今年度は 8 月に北山新学長が学長としては本学初のサモア現地を公式訪問し、NUS との交流協定の見直しを行った。その結果、学生間の短期留学事業はいったん終了し、教職員間の学術交流に関する覚書「Memorandum of Understanding（MOU）」を再締結した。

そして 2 月には本学最後となるサモアでの国際看護実習を 3 名が履修した。実習の中盤では、サバイイ島での訪問看護に同行し、日本ではまず遭遇することのない患者様の姿に驚くばかりではなく、それらを学びとして感じとる感性はもちろん、それを的確に表現するための努力、それを表現する勇気、チャンスの獲得を帰国後の課題として持ち帰った。また渡航年は例年、日本とは異なった環境での生活および健康管理と、学生にとっては非日常的な異国でのストレス管理も課題となっている。そのような中、私たちの宿舎には、ウポル島、サバイイ島のいたるところで看護師として活躍する元来学 NUS 卒業生たちが、朝早くから夜遅くのシフトにもかかわらず、私たちの滞在を気にかけ、差し入れやお土産をもって幾たびも宿舎に駆けつけて、激励下さった。こうした現地の方々のサポートに学生たちは、毎回、経済指標や保健指標では測れないサモアの豊かさ、懐の大きさをかみ締めてきた。実習の最終日には、NUS 学内での実習成果発表会を終了した私たちに、学生委員会からの友情の表明と NUS 看護学科教員からの歩み寄りがあり、これまでに築きあってきた NUS と本学の関係の深まりをまさに実感する時間を持つことができた。

国際看護実習として始まって以来、永きにわたりサモア国立大学と長野県看護大学の短期交換留学事業を支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

サモア国立大学看護学部生と共に



駒ケ根シルクミュージアムで特別注文した、
まゆクラフトをお土産とした

## ３　中国医科大学／揚州大学学術交流プロジェクト

リーダー：喬炎

メンバー：北山秋雄　屋良朝彦　柄澤邦江　近藤恵子

【2018 年度の活動】

1　7 月に喬教授が中国医科大学看護学院を訪問、講演。

2　8 月に揚州大学看護学院の劉佩健院長の来学。

3　9 月に北山学長が揚州大学を訪問して、両校の国際学術交流 MOU を正式に調印。また、揚州大学へのコミュニュティー看護共同研究施設の設立について検討した。

**揚州大学との国際学術交流 MOU の調印式**

4　揚州大学大学院生 2 名と学部生 1 名を本学に短期留学生として迎え入れ、看護研究および学生との交流を行った。

**揚州大学の大学院生の本学での留学報告会**

5　2019 年 3 月に北山学長、渡辺学部長と教員 3 名（喬教授、細田講師、曽根助教）が揚州大学を訪問、渡辺学部長と細田講師、曽根助教が老年看護について講演した。また、揚州大学と本学の共催で 2019 年 5 月に開催する日中看護シンポジウムについて打ち合わせた。さらに揚州大学と本学とのコミュニュティー看護共同研究室の設立と除幕式に参加、この施設をフィールドとして効果的に共同研究を行うことが期待される。帰国の経由地 上海で北山学長と喬教授が復旦大学看護学院も視察した。

## 4　カンボジア等（東南アジア地域）交流プロジェクト

リーダー：北山秋雄
メンバー：宮越幸代　村井ふみ　田中真木　秋山剛

### カンボジア王国での視察研修

平成 31 年度からの国際看護実習を検討するために、平成 30 年 3 月 22 日から 1 週間カンボジア王国（以下、カ国）を訪ね、首都プノンペンを中心に、複数の市内病院、看護系大学、輸血センター等を視察した。その中の一つ Sunrise Japan Hospital Phnom Penh（SJH）は、カンボジア人看護師等の研修を日本で受け入れ、その後、日本人医療スタッフをこの病院に派遣し、支援を続けてきていた。SJH は病床数 50 床、脳神経外科、消化器外科、一般内科、小児科を開設し、従来は国外でしか受けられなかった高度な医療を実現していた。この病院で、日本から派遣された看護師の実際の活動場面を視察した。SJH では日本と同様なレベルの医療･看護サービスを提供することを目指し日々取り組んでいるとのことであった。また、日本人医療スタッフは、日本で学んだ内容がカ国現地に定着しにくいのはどのようなことか、その背景には何があるかを現地で具体的に理解する努力をおこなっていた。このことは、研修の成果が持続発展的に伝達されていくことが難しい開発途上国においては、非常に重要な視点であり、派遣受け入れ病院と現地の病院が同じ組織体である強みでもあると感じた。

看護系大学では、看護学科長がカ国における糖尿病対策、老年看護学の重要性をカ国の急激な経済成長や、クメール・ルージュの影響で介護を担う人材の不足などの社会的、歴史的背景からカ国の現状を丁寧に説明いただいた。

国立病院では、男女混合の病室があったり、Open air の通路で患者様が創傷の処置を受けていたり、いくつもの保育器は壊れたまま放置されている状況を目のあたりにし、看護を始め保健医療分野において解決しなければならない課題はまだまだ多い事を実感した。カ国はポル・ポトによる独裁政権から 30 年ほどしか経っていない一方、市内には日本の大規模ショッピング・モールが次々と進出し、日本と変わらない生活も可能となっていた。カ国での看護実習は、このような経済の急成長に追いつかないカ国の社会インフラの遅れ、歴史や様々な文化的背景と保健医療や看護の課題を関連付けて考え、真に求められる国際協力の在り方を熟考できる機会になると考えた。

Sunrise Japan Hospital Phnom Penh

# 第４章　学外機関連携部門

## 第１節　学外機関連携部門の概要

部門長：安田貴恵子

### １　所掌事項

①　看護連携型ユニフィケーション事業による教育連携、相互研修、研究交流の推進。

②　企業、自治体、研究機関等との共同研究・受託研究等を実施し、本学の「知の活用」を図り地域社会に貢献するための窓口として活動。

③　自治体との包括的連携協定に基づく事業の推進。

### ２　組織及び活動

看護ユニフィケーションチーム、産学官連携チーム、自治体連携チームが活動を推進している。

(1)　看護ユニフィケーションチーム　　リーダー：伊藤佑紀子

・看護研究研修会、精神科セミナー・研究指導、相互研修「ユニフィケーション研修会」
・教員の臨床研修、学内演習への臨床看護師の協力
・病院の事例検討会等への参加

(2)　産学官連携チーム　　リーダー：喬　炎

・共同研究・受託研究の窓口としての活動とその後の研究の発展
・学内教職員向けの産学官連携研修会の開催
・「スマート看護・福祉研究会」での情報交換
・伊那谷アグリイノベーション推進機構での情報交換
・長野県における産学官連携団体への参加と産学官連携に関連する情報の提供

(3)　自治体連携チーム　　リーダー：安田貴恵子

・駒ケ根市ネパール交流市民の会の活動への協力
・駒ケ根市地域包括支援センター、認知症にかかわる住民の協働活動への支援

## 第２節　活動実績

### １　看護ユニフィケーションチーム

リーダー：伊藤祐紀子
メンバー：安東由佳子　岡田実　金子さゆり　千葉真弓　東修　西村理恵　白井史　那須淳子
富田美雪　長谷川志保　林陽子

### １　概　要

平成 27 年度よりスタートした「看護連携型ユニフィケーション事業」は、平成 30 年度で 4 年目を向かえる。現在、締結施設は 5 施設（伊那中央病院、昭和伊南総合病院、飯田市立病院、こころの医療センター駒ケ根、伊那神経科病院）となった。今年度の事業方針として、看護実践・教育・研究面において連携し、看護職者のキャリア形成を推進するとともに、看護ケアおよび看護教育の質の向上や看護協同研究を発展させることと、事業を開始して 4 年目を向かえることから一連の事業に関して評価することとした。3 つの主要事業『教育連携』『相互研修』『研究交流』についてその内容を計画し、以下のように実施した。

### ２　活動実績

#### 1）教育連携事業

(1)　臨床指導者の学部選択科目「助産方法Ⅱ」演習への参加（演習担当：西村理恵　講師）

日時：平成 30 年 8 月 29 日（水）13：30～16：30

概要：学生の状況に応じた教育・指導について臨床指導者と教員が協議する機会とすることを目的とした。実習施設（伊那中央病院、諏訪赤十字病院）の臨床指導者 2 名、教員 5 名、学生 5 名が参加した。

評価：臨床指導者、学生の感想から今後の講義・演習を検討する機会となり、継続してほしいと要望された。

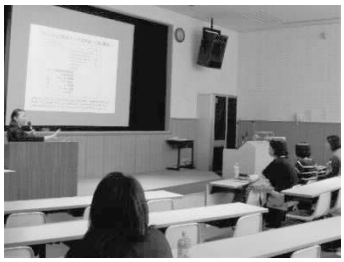
演習：助産方法Ⅱの様子

(2)　人材育成のための効果的な指導方法に関する講義（講義担当：金子さゆり　教授）

日時：平成 30 年 11 月 29 日（木）16：20～17：50

概要：学生および新人育成のための効果的な方法を学ぶことを目的に学生指導・新人教育に関わる看護職 27 名（飯田市立病院、昭和伊南総合病院、岡谷市民病院、諏訪赤十字病院、諏訪中央病院）、教員 8 名が大学院共通選択科目「看護・教育援助論：効果的な指導方法（コーチング技法）」を聴講した。

評価：アンケートより講義内容の理解度は高く、「指導に活用しようと思う」という意見が複数あった。



講義：「人材育成のための効果的な指導方法」の様子

(3)　キャリア形成“手がかり”支援　～大学院授業の公開と現役大学生の交流

日時：平成30年11月29日（木）18：00～18：40

概要：大学院における授業体験と大学院生との交流を通じて、臨床に勤務する看護職のキャリア形成について考える機会とすることを目的に大学院に興味のある看護職21名が参加し、大学院生および教員と交流した。

評価：アンケートより「必要な情報を知ることができた」と好評であったが、開催時期については、大学院受験に繋げるためにはもっと早い時期が望ましいという意見があった。

キャリア形成“手がかり”支援～現役大学生の交流

**2）相互研修事業**

(1)　教育連携事業と統合しての相互研修事業

テーマ：看護学生を育てるための「つながり」と「つなぐ」を考える

日時：平成31年3月18（月）13：00～15：00

講師：愛知県ソフィア看護専門学校校長小林佐知子先生

概要：実習委員会との共催にて開催された。締結5施設他本学の全実習施設より14名、教員33名が参加した。

評価：アンケートより講義内容の理解度および今後の活用については高かった。また、自由記載欄には、事例をもとにグループ討議した感想が複数記載されていた。

**相互研修の様子**

### 3） 研究交流事業

（1） 看護研究研修会「やってみよう！事例研究」の開催（講師：伊藤祐紀子　教授）

日時：平成 30 年 9 月 13 日（木）13：30～16：00

概要：希望により昨年度と同内容で実施し、討議時間を長めに設けた。協定締結施設から 9 名、教員 14 名（講義のみ）が参加した。

評価：講義の理解度は高く、自らの研究に結びつけて捉えていた。

看護研究研修会の様子

### 4） その他の活動

（1） 締結 5 施設の依頼によって実施された事業の整理、年度の実績として資料の作成を行った。

概要：依頼事業件数（複数開催を含む）14 件　担当教員数 16 名

**表 1. 平成 30 年度　看護連携型ユニフィケーション協定締結施設依頼事業の担当実績**

| 依頼内容 | 日程・期間 | 依頼施設 | 担当教員 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| メンバーシップ研修　講師 | H30.6.7 | 伊那中央病院 | 渡辺みどり | |
| 平成 29～30 年度　看護研究指導 | H30.7.5　ほか | 伊那中央病院 | 藤原聡子 | |
| 平成 29～30 年度　看護研究指導 | H30.7.5　ほか | 伊那中央病院 | 髙橋百合子 | |
| 平成 29～30 年度　看護研究指導 | H30.7.5　ほか | 伊那中央病院 | 上條こずえ | |
| リーダーシップ研修　講師 | H30.7.3<br>H30.10.31 | 伊那中央病院 | 井本英津子 | |
| リーダーシップレベルアップ研修　講師 | H30.9.21<br>H30.11.14 | 伊那中央病院 | 井本英津子 | |
| プリセプター準備研修　講師 | H31.3.14 | 伊那中央病院 | 井本英津子 | |
| 看護過程に関する研修　講師 | H30.5.23<br>H30.6.20 | 飯田市立病院 | 金子さゆり | |
| 看護部管理者研修　講師 | H30.12.9 | 飯田市立病院 | 金子さゆり | |
| 平成 30 年度院内教育研修　看護研究指導 | H30.4～H31.3 | 昭和伊南総合病院 | 安東由佳子 | 年 4～6 回 |
| 平成 30 年度院内教育研修　看護倫理審査 | H30.4～H31.3 | 昭和伊南総合病院 | 安東由佳子 | 年 4 回 |
| 院内事例検討会　講評 | H30.11.17 | 昭和伊南総合病院 | 浦野理香<br>田村かおり<br>富田美雪 | |
| 精神科看護オンライン・ワークショップによる看護実践に関するコンサルテーション | H30.5～H31.4 | 伊那神経科病院 | 岡田 実 | 月 1 回 |
| 精神科看護オンライン・ワークショップによる看護実践に関するコンサルテーション | H30.5～H31.4 | 伊那神経科病院 | 東　修 | 月 1 回 |

(2)　看護連携型ユニフィケーション事業協議会の開催

日時：平成31年1月24日　14：00～16：00

概要：今年度の各事業についての評価および次年度活動計画の検討をした。

## 3　今後の課題

・現在の事業は、大学側より施設に向けての実施事業が中心である。施設側から大学に参加を呼び掛ける双方向の交流事業に発展させていくことが必要である。平成30年度末に締結5施設に対して、教員が参加可能な院内研修の日程や研究倫理審査年間日程などを提示してもらうよう働きかけたところである。これらを受けて、教職員への参加案内、参加状況の把握を行うことが必要である。また、各施設の倫理審査については、審査のための書式等を含めて把握し、情報提供することが必要である。

・各事業の案内については、締結5施設以外の実習施設も含め送付している現状にある。締結の有無にかかわらず、実習施設との関係性は良好に維持されている。このような現状にあって、今後の方向性として締結施設数を増やす必然性があるのか、否か、判断がつけにくいという課題がある。改めて実習施設の意向を踏まえ検討が必要である。

## 2　産学官連携チーム

リーダー：喬　炎
メンバー：北山秋雄(副リーダー)　屋良朝彦　小野塚元子　熊谷理恵
　　宮村泰之（事務局長）

### 1　活動実績

(1)　共同研究・受託研究の窓口としての活動とその後の研究の発展

1）健康・保健学分野の北山秋雄教授らの「遠隔看護システム機器の開発」事業は継続で行われている。

2）　駒ケ根市における先端的 ICT を用いた特定健診受診者のフォローアップシステムの構築に関する研究（代表者：健康・保健学分野　北山教授）

3）「地域円卓会議@名古屋」（屋良准教授）
名古屋を中心とした精神障碍者就労移行支援事業所と共同で、障碍者の就労継続を支援するための対話集会で今年と去年には本学でも行った(参加者 40 名)。

4）「セルロース誘導体液晶エラストマーを用いた褥瘡早期診断法と診断装置の開発」（東京理科大学との共同研究、代表者：基礎医学・疾病学分野　喬）

5）「幹細胞培養液の創部投与による早期褥瘡の早期治療の試み」（国際抗老化再生医療学会との共同研究、代表者：基礎医学・疾病学分野　喬）

6）「在宅看護介護用センシング技術の褥瘡診断装置の開発に関する共同研究」（産業技術総合研究所との共同研究、代表者：基礎医学・疾病学分野　喬）

(2)　「スマート看護・福祉研究会」での情報交換
今年度も引き続き「スマート看護・福祉研究会」の活動に参加した。定例会において、福祉機器やリハビリテーション装置の開発に関して大学教員・医師から、また開発された機器に関して参加企業の責任者から講演会が開催され、意見交換を行った。

(3)　伊那谷アグリイノベーション推進機構での情報交換
伊那谷アグリイノベーション推進機構の運営、また本学は伊那谷アグリイノベーション推進機構の運営メンバーとして活動に参加した。

(4)　長野県における産学官連携団体への参加と産学官連携に関連する情報の提供
本年度も引き続き、「信州産学官連携機構」ならびに「信州メディカル産業振興会」に参加している。

### 2　今後の課題

現在、本チームでは主に産学連携事業が中心となっている。他大学では自治体と協定を結んで学官連携の事業も行われて、新たな段階に入ろうとしている。看護学の先進的研究・教育機関である唯一の県立大学として、地域とともに更なる発展を目指して活動全体を見直していくことが必要となっている。

## 3　自治体連携チーム

リーダー：安田貴恵子
メンバー：渡辺みどり　小野塚元子　秋山剛　柄澤邦江　伊藤郁恵　水主洋子　曽根千賀子
　　下村聡子

### 1　概　要

長野県看護大学教員の研究実績や専門性を活かして、駒ケ根市の保健医療福祉の推進に貢献する。

### 2　活動実績

主な活動を報告する。

1）駒ケ根市ネパール交流市民の会によるネパール国ポカラ市との協力事業への支援

駒ヶ根市は、ネパール国ポカラ市と国際交流を重ねてきている。ネパール交流市民の会が活動母体である。ネパール交流市民の会は、平成 26 年度より JICA 草の根技術支援事業の補助金を得て、「安全・安心な出産のための母子保健改善事業」に取り組み、平成 29 年度からは第２フェーズを展開している。

・ポカラ市からの研修員が駒ケ根に滞在して受ける本邦研修への協力

看護大学での研修は、平成 30 年 9 月 4 日、母子友好病院の小児科医師、ポカラ市副市長、保健課長の 3 名が来校した。今年度の研修内容は、プロジェクトリーダーからの依頼内容をうけて、教育機関と実習施設との協力関係、地域の中での教育機関の役割を主な内容とした（表）。また、ランチタイムでは、学内からの参加を募り、ネパールカレーを食べなら交流できるようにした。

本邦研修の受け入れにおいては、自治体連携チームと国際看護・災害看護活動研究部門が協力して対応するとともに、学内教員にも広く参加していただけるよう工夫している。このことは、前述の JICA 草の根技術支援事業によるプロジェクトの中に、「市民レベルの交流の推進」が含まれていることを受けて、意図をもって取り組むものである。

表．研修の内容

| | |
|---|---|
| 施設見学（実習室、図書館、プールなど） | |
| 講話１ | ・臨地実習の質を高めるための実習施設との連携<br>・長野県看護大学ユニフィケーション事業の取り組み |
| 講話２ | ・長野県看護大学が取り組む地域貢献活動の紹介<br>・看護大学と駒ケ根市の包括的連携協定について<br>・地域と協働した防災、減災の取り組み |

・プロジェクト報告会への参加

4 月 18 日に行われた現地視察報告会（アルパ多目的ホール）に、安田が参加した。
9 月 12 日に行われた本邦研修報告会（アルパ多目的ホール）に、安田が参加した。

写真：研修にこられたみなさんと記念撮影

写真：本学食堂での昼食会、おいしいカレーをいただきました

2）認知症支援における地域包括支援センターと住民の協働活動への支援【おれんじネット】

今年度、おれんじネットは認知症カフェの開催など定期的な活動を精力的に行うとともに、認知症に対する啓発活動、住民同士での支援の輪の拡大を計画した。その中で、本学としては、以下の活動への協力を行った。

①9 月 2 日：駒ヶ根市ふれあい広場での啓発活動への協力、②9 月 24 日：認知症フレンドシップクラブ「RUN 伴 Nagano2018」の後援と本学教員、認知症看護認定看護師教育課程学生の参加、③10 月 13・14 日：認知症の人と家族の会長野県支部研修・交流会での京都支部の会員（認知症の当事者とその家族 1 組）との交流の調整、④1 月 20 日：「認知症を考える市民シンポジウム」への参加、⑤2 月 9 日：認知症サポーターステップアップ講座 in 小町屋の講師（細田講師）の 5 点である。これらの協力を通し、おれんじネット会員や駒ヶ根市地域包括支援センターとのつながりを築くことができた。今後も活動の維持発展のためのサポートを継続していく。

地域・在宅看護学分野　小野塚　元子

## 3　今後の課題

平成 28 年度からスタートし、今期３年目の活動であった。チーム員以外の学内教員の参加協力を得られていることに感謝している。今後も引き続いてお願いしていきたい。

# 第５章　認定看護師教育部門

## 第１節　認定看護師教育部門の概要

部門長　渡辺みどり

平成 23 年度、看護実践国際研究センターに「皮膚・排泄ケア」、「感染管理」の認定看護師教育課程を開設、平成 25 年度からは「感染管理」、「認知症看護」分野を開講した。(「皮膚・排泄ケア」は平成 25 年度から、「感染管理」は平成 29 年度から休講)

特定の看護分野における熟練した看護実践能力を養い、高い臨床力を身につけるためには、現象と事象をその背景を含めて観ていくための想像力を涵養する必要がある。それには、研究的雰囲気に浸ることや時間のゆとりが大事になる。そこで本学では、看護研究活動の基地的機関としての本センターに認定看護師教育課程を位置づけ、教育期間を８か月に設定して、優秀な認定看護師の育成を図っている。

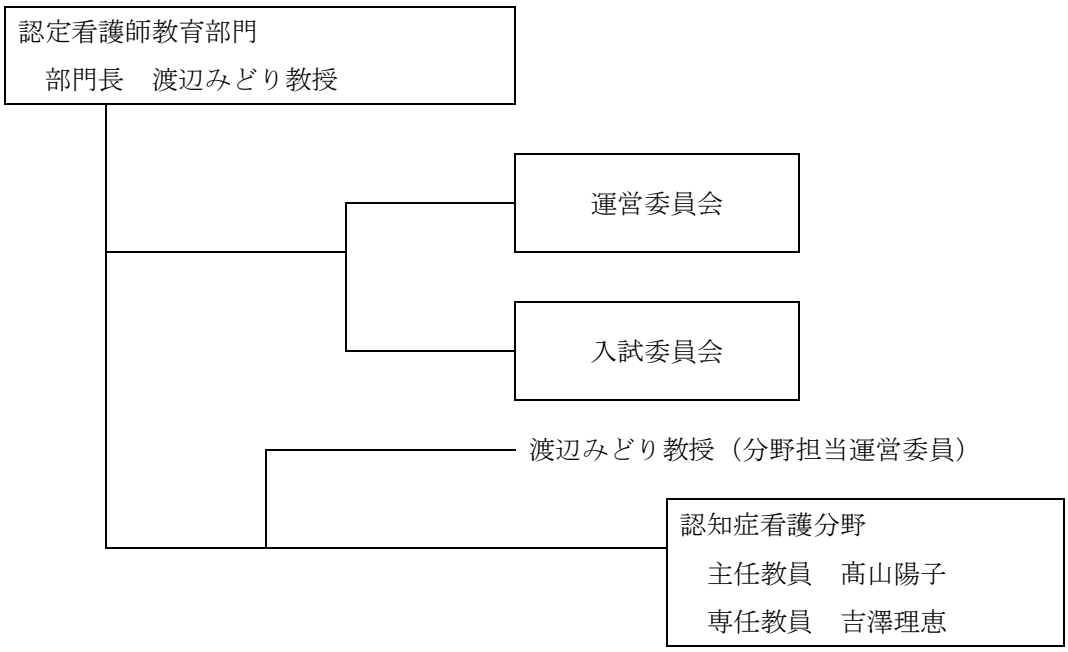
（認定看護師は、高度化し専門分化が進む医療の現場において、水準の高い看護を実践できると認められた看護師。「認定看護分野」ごとに日本看護協会が認定している。看護師として５年以上の実践経験を持ち、日本看護協会が定める 645 時間以上の認定看護師教育を修め、認定看護師認定審査に合格することで資格を取得できる。）

### １　所掌事項

１）認定看護師教育課程における運営に関する検討と決定(運営委員会)
２）募集・入試に関する検討と決定(入試委員会)
３）カリキュラムおよび実習の内容に関する検討と決定(教員会議及び運営委員会)
４）非常勤講師の選定と決定(教員会議及び運営委員会)
５）実習病院の選定と決定(教員会議及び運営委員会)
６）受講生の生活に関すること(教員会議)
７）休講・開講に関する検討と決定(教員会議及び運営委員会)
８）運営会議下部組織　教員会議の運営

## 第２節　活動実績

１　組織




２　運営委員会

１）運営委員会名簿

委員の任期：平成 29 年４月１日～平成 31 年３月 31 日

| 氏名 | 所属等 | |
|---|---|---|
| 北山秋雄 | 学長（看護実践国際研究センター長） | 委員長 |
| 渡辺みどり | 学部長(看護実践国際研究副センター長、認定看護師教育部門長) | 委員 |
| 安田貴恵子 | 研究科長(看護実践国際研究副センター長) | |
| 髙山陽子 | 認定看護師教育部門 主任教員（認知症看護分野） | |
| 吉澤理恵 | 認定看護師教育部門 専任教員（認知症看護分野） | |
| 小西育子 | 長野県看護協会 常務理事（本学の教員以外で学長が委嘱する委員） | |
| 宮村泰之 | 看護大学 事務局長 | 事務局 |
| 刈間俊也 | 看護大学事務局 次長兼総務課長 | |
| 鮎澤宏和 | 看護大学事務局 教務・学生課長 | |
| 佐々木剛 | 看護大学事務局 教務・学生課　課長補佐 | |
| 長野恵理子 | 看護大学事務局 認定看護師教育課程担当 | |

２）運営委員会開催状況

| 回 | 日時 | 協議・報告事項 |
|---|---|---|
| 1 | ５月 16 日<br>（水）<br>13：30<br>～14：35 | (1)認定看護師教育部門組織図について<br>(2)平成 30 年度受講生名簿について<br>(3)平成 30 年度開講式実施計画について<br>(4)平成 30 年度学事暦について<br>(5)平成 30 年度非常勤講師について<br>(6)教育課程の準備の進捗状況について<br>(7)送迎バスについて<br>(8)入学試験関係日程について<br>(9)その他 |
| 2 | ７月 18 日<br>（水）<br>13：55<br>～15：02 | (1)認定審査結果について<br>(2)平成 31 年度受講生の募集及び募集説明会の開催について<br>(3)平成 30 年度受講生の現状について<br>(4)認定看護師教育課程の受講・修了状況について<br>(5)平成 30 年度の実習について<br>(6)認定看護師教育部門の今後の運営に関する検討について<br>(7)その他 |
| 3 | 10 月４日<br>（木）<br>13：30<br>～13：53 | (1)平成 31 年度受講生説明会の参加者について<br>(2)実習の可否に関わる成績認定について<br>(3)受講生の状況について<br>(4)認定看護師教育部門の今後の方向性について<br>(5)その他 |
| 4 | 12 月 11 日<br>（火）<br>10：45<br>～11：20 | (1)平成 31 年度受講審査（選抜試験）合否判定結果の報告について<br>(2)平成 31 年度受講審査 2 次募集について<br>(3)受講生の現状について<br>(4)実習の合否（見込）について<br>(5)平成 30 年度認定看護師教育課程修了式実施計画(案)について<br>(6)その他 |
| 5 | 平成 31 年<br>１月 25 日<br>（金）<br>10：00<br>～10：40 | (1)修了試験結果について<br>(2)平成 30 年度修了生のフォローアップ研修について<br>(3)受講生の状況について<br>(4)その他 |
| 6 | 平成 31 年<br>２月 21 日<br>（水）<br>13：10<br>～13：55 | (1)平成 31 年度受講審査（選抜試験）2 次募集合否判定結果の報告について<br>(2)平成 31 年度受講審査 3 次募集について<br>(3)受講、修了状況について<br>(4)平成 31 年度部門運営委員会及び入試委員会について<br>(5)その他 |

３　入試委員会

１）入試委員会名簿

委員の任期：平成 29 年４月１日～平成 31 年３月 31 日

| 氏名 | 所属等 | |
|---|---|---|
| 安田貴恵子 | 研究科長(看護実践国際研究副センター長) | 委員長 |
| 渡辺みどり | 学部長(看護実践国際研究副センター長、認定看護師教育部門長) | 委員 |
| 細田江美 | 講師（老年看護学分野） | |
| 髙山陽子 | 認定看護師教育部門 主任教員（認知症看護分野） | |
| 吉澤理恵 | 認定看護師教育部門 専任教員（認知症看護分野） | |
| 小西育子 | 長野県看護協会 常務理事（本学の教員以外で学長が委嘱する委員） | |
| 宮村泰之 | 看護大学 事務局長 | 事務局 |
| 刈間俊也 | 看護大学事務局 次長兼総務課長 | |
| 鮎澤宏和 | 看護大学事務局 教務・学生課長 | |
| 佐々木剛 | 看護大学事務局 教務・学生課　課長補佐 | |
| 長野恵理子 | 看護大学事務局 認定看護師教育課程担当 | |

２）入試委員会開催状況

| 回 | 日時 | 協議・報告事項 |
|---|---|---|
| 1 | ７月 18 日（水）<br>13：30～13：54 | (1)平成 31 年度認定看護師教育課程受講生募集要項(案)について<br>(2)その他 |
| 2 | 10 月４日（木）<br>13：53～14：05 | (1)平成 31 年度受講試験の業務処理要領について<br>(2)その他 |
| 3 | 12 月 11 日(火)<br>10：00～10：43 | (1)平成 31 年度受講審査（選抜試験）の結果について<br>(2)平成 31 年度受講生の 2 次募集について<br>(3)その他 |
| 4 | ２月 21 日（火）<br>13：00～13：10 | (1)平成 31 年度受講審査（選抜試験）2 次募集の結果について<br>(2)その他 |

４　実習病院一覧

１－１）認知症看護分野の看護実践実習病院

| 病院名 | 住所 |
|---|---|
| JA 長野厚生連 北信総合病院 | 中野市西１-５-６３ |
| 昭和伊南総合病院 | 駒ケ根市赤穂３２３０ |
| JA 長野厚生連 南長野医療センター<br>篠ノ井総合病院 | 長野市篠ノ井会６６６－１ |
| 塩尻協立病院 | 塩尻市桟敷４３７ |
| 市立大町総合病院 | 大町市大町３１３０ |
| 独立行政法人 国立病院機構<br>小諸高原病院 | 小諸市甲４５９８ |
| 飯田市立病院 | 飯田市八幡町４３８番地 |
| 飯田病院 | 飯田市大通１丁目１５ |
| 医療法人愛生会<br>総合上飯田第一病院 | 愛知県名古屋市北区上飯田北町２-７０ |
| 名鉄病院 | 愛知県名古屋市西区栄生２-２６-１１ |
| 岐阜病院 | 岐阜県岐阜市日野東３-１３-６ |
| JA 岐阜厚生連 揖斐厚生病院 | 岐阜県揖斐郡揖斐川町三輪２５４７-４ |

１－２）認知症看護分野の見学実習施設

| 施設名 | 住所 |
|---|---|
| 高齢者グループホーム ふきぼこ | 塩尻市大字桟敷５３８－１ |
| 介護型有料老人ホーム みずほの里 | 塩尻市大字桟敷４１７－２ |
| デイサービスセンター はなみずき | 塩尻市大字桟敷４１７－２ |
| 小規模多機能型居宅介護施設<br>おひさま | 塩尻市大字桟敷４１７－２ |
| まるのうちラクシア | 松本市島内３５７９-１ |
| 老人保健施設 はびろの里 | 伊那市西箕輪２７５８－１ |
| 長野県阿南介護老人保健施設<br>アイライフあなん | 下伊那郡阿南町北條２００９-１ |
| 宅老所 花うた | 伊那市西春近３３０８－３ |
| グループホームま花 | 伊那市西春近３２８２－１７３ |
| デイサービス 峠茶屋 | 松本市刈谷原５３１－１ |
| グループホーム すみか | 松本市反町７０７－１ |

## 第３節　受講生の状況

### １　受講・修了状況

平成 23 年度に開設された認定看護師教育部門は、今年度 8 年目を迎えた。この間、皮膚・排泄ケア分野（平成 23 年度～24 年度）28 名、感染管理分野（平成 23 年度～28 年度）99 名、認知症看護分野（平成 25 年度～）114 名の修了生を輩出し、これに伴って、これら三分野における長野県内の認定看護師数は著しく増加した。

受講生の状況［平成 23～30 年度］　（単位：人）

| 分　野 | 応募者数 | 合格者数 | 受講生数 | | | 修了生数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | うち県内 | 構成比(%) | |
| 皮膚・排泄ケア (H23～24) | 38 | 35 | 31 | 23 | 74.2 | 28 |
| 感染管理 (H23～28) | 127 | 114 | 105 | 43 | 41.0 | 99 |
| 認知症看護 (H25～30) | 214 | 139 | 130 | 53 | 40.8 | 114 |
| 計 | 379 | 288 | 266 | 119 | 44.7 | 241 |

### ２　平成 30 年度認知症看護分野活動報告

平成 29 年度修了生 23 名は、5 月に実施された認定看護師審査に全員合格し、認知症看護認定看護師の資格を取得することが出来た。引き続き、今年度当分野を終了した 20 名（県内１名）も、次年度に行われる審査試験に向けフォローアップ研修の他、自主的に学習会を開くなど積極的に取り組んでいる。

認定看護師教育では、急性期病院での臨地実習において 2 事例を展開するための看護過程の演習時間を確保し、教育内容の充実を図った。また審査試験に向けてのフォローアップ研修を開催した。

修了生の活動状況としては、各所属病院内において認知症ケアチームの一員として重要な役割を担うとともに、認定看護師教育課程の講師や実習指導などを通じた後進育成、高齢者ケア研究会での企画運営の他、長野県看護職員認知症対応力向上研修において講義演習を担当するなど、病院内に留まらず活動の幅を広げている。また、学会参加や修了生同士のネットワークを通じて常に情報交換を行うなど、自己研鑽に励んでいる。当分野における修了生への支援として、講義の再聴講の受け入れ、学会発表へのサポートや困難事例の検討会、数々の情報提供などを行った。

当認定看護師教育課程は、平成 23 年の開校から 9 年間に、皮膚・排泄ケア認定看護師 28 名、感染管理認定看護師 99 名、認知症看護認定看護師 139 名（令和元年度 25 名含む）の修了生を輩出し、医療現場のみならず地域で活躍している。しかし昨今の医療、社会のニーズの変化と共に認定看護師教育も特定行為を含む教育へと変わりつつある。当教育部門

は、令和元年度を最後に閉講となるが今後も社会の動向を注視し、修了生のフォローアップや自己研鑽の場となれるように支援していく方針である。

# 第６章　キャリア形成支援部門

## 第１節　キャリア形成支援部門の概要

部 門 長：藤原聡子
メンバー：岡田実　竹内幸江　松本淳子　有賀美恵子　髙橋百合子　森野貴輝
村井ふみ　井本英津子　伊藤佑季　井出彩織　青木駿介
中村康子（学生支援員）　米窪伸一郎（就職支援員）

### １　所掌事項

①　教育・研究機会の提供および研究活動に係る支援
②　進学、転職などに係る相談および情報の提供
③　大学ホームページ等を活用して情報交換の場の提供
④　その他、卒業生・修了生のキャリア形成支援に関する調査・研究

### ２　活動目標

本学で看護学を修めた卒業生・修了生が、その後も実践を通して大学との交流を継続できるよう、キャリア形成支援部門が「魅力的な基地」づくりを目指す。

さらに、卒業生・修了生の新任期における職場定着や看護職としてのキャリア形成支援に取り組み、大学としての地域貢献の役割を果たしていく。

## 第２節　活動実績

### １　部門会議

平成 30 年度は、岡田教授から藤原に部門長が引き継がれた。平成 30 年度の部門員は、藤原以下、岡田教授、竹内准教授、松本准教授、有賀准教授、髙橋講師、森野助教、村井助教、井本助教、伊藤助手、井出助手、青木助手の他、中村学生支援員、米窪就職支援員を含めて 13 名で構成され、主に『平成 29 年度卒業生あつまれ！』の企画を中心に活動が行われた。会議の開催は、あわせて２回であり、内容は以下の通りである。

| | |
|---|---|
| 平成 30 年 7 月 31 日（水） | ・「平成 29 年度卒業生あつまれ！」の会場配置図<br>・アンケート内容の修正と検討<br>・企画の進行及び役割分担<br>上記 3 点について意見を集約した。 |
| 平成 31 年 3 月 4 日（月） | ・「平成 29 年度卒業生あつまれ！」の振り返り<br>・卒業生のアンケート集計結果<br>・卒業生の相談窓口の相談内容の紹介、<br>卒業生からの便り紹介<br>・次年度の活動方針の決定 |

### ２　活動成果

(1)　卒後 1 年目の卒業生に対する支援

学部卒業生 1 年目に対する支援として「平成 29 年度卒業生あつまれ！」を企画し、平成 30 年 9 月 8 日（土、鈴風祭初日 15：00～16：30）に実施した。当日は部門員の他、学長はじめ学年顧問、学内教職員の参加も得られた。今年度は卒業生 61 名（73%）が参加し、アンケート協力に同意したのは 97%だった。今回は、フリートークの時間を多くもつように企画したが、「よく話ができて楽しかった」という感想があり、これからの企画内容の希望については、「このような会や同窓会を定期的に開催してほしい」とするものが多かった。参加した平成 29 年度卒業生のアンケート調査を行ったので以下に報告する。

調査結果

目　　的　本学卒業生の職場に対する思いを知り、卒業生に対する今後のキャリア形成支援を検討する資料とする。

調査内容　①入職の動機、②職場への感想、③職場での困りごととその内容、④職場決定に際し学部生に伝えたいことなど、⑤感想、⑥キャリア形成支援部門の企画に対する思いや希望などの 6 項目。

結　　果

1)　現在の職場へ就職した当初の動機（複数回答）

最も多いものから順に、①地元である（35 件・31%）、②教育研修の充実（13 件・11%）、③職場の雰囲気（11 件・10%）、④福利厚生の充実、（10 件・9%）

2)　現在の職場についての感想（回答数 57）

① 大変満足している ……　28 年度 21.0%→29 年度　9%

② 満足している ……　28 年度 45.2%→29 年度 19%

③ こんなものだろうと思っている……28 年度 25.8%→29 年度 56%

④ 不満が多くできれば他の職場に移りたい…28 年度　8.0%→29 年度 10%

⑤ 奨学金返還免除の在職期間が過ぎたら他の職場に移りたい 29 年度　5%

3)　入職してから困っていることについて（回答数 47）

困っていることがある…60%、　困っていることはとくにない…40%

・困りごとの内容（複数回答・40 件）

①業務をこなせない(18%)、②忙しくて休めない(15%)、③人間関係(13%)、④自分の知識不足（13%)、⑤自分の成長が実感できない（10%)、⑥残業代が出ない（10%)、⑦残業の多さ（10%)、⑧看護師をやめたい（8%)

4)　職場決定に際し学部生に伝えたいこと（自由記載）

インターンシップは必ずいくべき（３名)、インターンシップと実際が違う、あてにしない方がよい（２名)、自分で調査するべき（２名)、プライベートを第１に考えたほうがいい（１名)、今のうちに遊べ（１名)、自分を知るべき（１名)、どの職場も苦しい（1 名）　など

考　　察

今回、入職動機について初めて調査を行ったが、この学年は「地元である」という理由から職場を選ぶ学生が多かったのがわかった。

職場に対する満足では「満足している」が前年度の調査からすると減っている。また「職場による不満から転職したい」が増えているのが特徴的である。

職場に対する困りごとでは、「自分の知識不足」（13%）「自分の成長が実感できない」（10%）など、自分自身の成長に関わる問題が２割以上を占めていた。新卒者というこの年代の人たちが辿る成長痛というべき特徴的なものであるだろうと考える。「忙しくて休めない」は、「業務がこなせない」「残業の多さ」に関連し、自らが成長し業務に慣れることによって、解決する問題もあると考える。

(2)　その他の卒業生に対する支援

本学の卒業生を対象に、キャリア形成の節目に卒業生が頼りにできる母校であることを願って、卒業生の進学や資格取得等の相談窓口を設置したことを、大学 HP を通じて周知を図った。その結果，今年度 soudan@nagano-nurs.ac.jp にアク

セスしてきた相談件数は３件と多くはないが、教職員の協力を得ながら丁寧に対処している。詳細は以下の通り。

| No. | 卒業年度 | 相　談　内　容 | 対　　応 |
|---|---|---|---|
| 1 | H27 編入生 | 看護師として働いているが、保健師に転職したい。 | 部門教員が対応。次年度保健師採用試験に向けて準備をしていくこととなった。 |
| 2 | H25 編入生 | 保健師として働いているが、精神保健福祉士の資格を取りたい。 | 事務局にて資料を準備し対応。 |
| 3 | H18 学部生 | 保健センターで働いており保健師資格の取得希望（卒業時不合格）。 | 部門教員が対応。保健師の国家試験に再チャレンジする。 |

今後とも、相談窓口の周知を図り、多くの卒業生がアクセスしやすい窓口として利用されることが期待される。

## ３　今後の活動

今後の活動については、第２回キャリア形成支援部門会議にて、H30 年度卒業生の「卒業生あつまれ！」企画を 2019 年 9 月 7 日（鈴風祭）に行うこと及び相談窓口の継続、HP のリニューアルを決定した。

(1)　喫緊の課題（懸案事項）

今後も「卒業生あつまれ」の企画を継続し、卒後１年目の新社会人どうしの交流を高い参加率を維持しながら促進する。

(2)　将来的な課題

・　本学同窓会と連携しながら、卒後 1 年目の卒業生に限定せず、卒業生が参集して交流を深め情報を共有する機会が必要である。

・　卒業生に対する長期的な支援策（職場の悩み事相談、看護研究支援、進学相談、転職相談など）を視野に入れ、相談窓口への積極的なアクセスを促すために、各種の機会を通じて卒業生に相談窓口の周知を図る。

# 附　　属　　資　　料

長野県看護大学看護実践国際研究センター規程

# 長野県看護大学看護実践国際研究センター規程

（平成 30 年４月１日現在）

（趣旨）

第１条　この規程は、長野県組織規則第 133 条の３に基づく、看護実践国際研究センター（以下「センター」という。）の組織及び管理運営について必要な事項を定める。

（組織）

第２条 センターには、看護地域貢献活動研究部門、国際看護・災害看護活動研究部門、学外機関連携部門、認定看護師教育部門及びキャリア形成支援部門を置く。また、必要に応じて各部門内にチームを置くことができる。

２ センターに、次の表の左欄に掲げる職を置き、右欄に掲げる職務を行う。

| | |
|---|---|
| センター長 | センター業務の掌理及び所属職員の指揮監督 |
| 副センター長 | センター長の補佐 |
| 部門長 | 部門の事業の掌理 |
| チームリーダー | チームの事業の掌理 |
| 研究員 | 部門（認定看護師教育部門を除く。）の事業に従事 |
| 認定看護師教育部門主任教員 | 認定看護師教育課程の担当分野の総括<br>認定看護師教育課程の事業に従事 |
| 認定看護師教育部門専任教員 | 認定看護師教育課程の事業に従事 |

３ センター長は学長が、副センター長は学部長及び研究科長がそれぞれ兼務する。

４ 部門長、チームリーダー及び研究員は、長野県看護大学教員の中から、教授会の委員会構成を勘案した上でセンター長が指名する。

５　部門長、チームリーダー及び研究員の任期は２年とし、再任は妨げない。

６　特任教授を除く全教員は、いずれかの部門に所属することとする。

７　部門長（認定看護師教育部門を除く。）は、センター長の承認を受け、研究員以外の者を研究に参加させることができる。

（センター運営会議）

第３条　センターの運営（認定看護師教育部門を除く。）に関する重要事項を審議するため、センター運営会議（以下「運営会議」という。）を置く。

２ 運営会議は、次の事項を審議する。

(1) 事業実施計画

(2) 事業実施報告

(3) 事業予算案

(4) 事業実施上の重要事項

(5) その他必要な事項

３　運営会議の組織は、次のとおりとする。

(1) センター長、副センター長、部門長（認定看護師教育部門を除く。）及び事務局長で構

成する。

(2) 議長はセンター長とし、運営会議を招集し総括する。また、議長に事故あるときは、副センター長がその職務を代行する。

(3) 書記は、事務局長をもって充て、運営会議の事務を処理する。

４ 運営会議は、次により開催する。

(1) 運営会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。

(2) 運営会議の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数の場合は議長が決定する。

(3) 議長が必要と認めるときは、構成員以外の者を運営会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(4) 議長は、必要に応じて会議の経過及び結果を教授会に報告する。

（認定看護師教育部門及びキャリア形成支援部門の運営）

第４条　認定看護師教育部門及びキャリア形成支援部門の運営に関する事項は別に定める。

（事務局）

第５条　事務局は総務課が行う。

（補則）

第６条 この規程の運用、解釈等について、疑義が生じたときは、教授会に諮りセンター長が決定する。

附　則

この規程は、平成 14 年 12 月 17 日から施行する。

附　則

この規程は、平成 20 年７月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成 23 年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成 24 年３月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成 26 年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成 28 年４月１日から施行する。

看護実践国際研究センター　平成 30 年度 実績報告書
令和元年 7 月発行

長野県看護大学
〒399-4117　長野県駒ケ根市赤穂 1694
TEL　0265-81-5100（代）FAX　0265-81-1256